
ご不要な魔導書買い取ります

夙多史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ご不要な魔導書買い取ります

【Nコード】

N9538X

【作者名】

夙多史

【あらすじ】

私立凜明高校に通う平凡な女子高生——来栖月葉は、自宅の倉庫で見つけた古い本と睨めっこしていた。この本、不思議なことになにをやっても開かないのだ。どうしても内容が気になった月葉が学校の友人に相談すると、常にオカルト的な本を所持しているクラスメイト——是洞真夜を紹介される。無口無表情で人を寄せつけない雰囲気を持つ真夜となんとか会話することに成功した月葉は、放課後、彼に教えられたとある場所に赴くことになる。——第8回MF文庫Jライトノベル新人賞第1回予備審査2次選考通過を経て帰

ってきた作品。 ※縦書きPDFだと文字化けする文字を使用しております。

公募投稿前に一度アップしていた作品ですが、見直ししつつ一話更新していききたいと思えます。毎日か週2更新かで迷っていましたが、間を取って週3更新にします。更新曜日は月・水・金です。

薄暗く、じめつとした空気が肌を撫でる。どこかカビたような酸っぱい臭いが鼻につく。

高い天井にはいくつものノスタルジックな裸電球が均等に並べられ、その白く頼りない光が広い室内を照らしている。

窓はない。地下だからだ。部屋の空間自体は広いが、見上げるほど背の高い棚で埋め尽くされているためどうしても窮屈さが否めない。棚には漬物石代わりに使えそうな分厚い本が隙間なく収納され、塵一つ積もっていないそれらから手入れに抜かりがないことが窺える。

そんな整備の行き届いた地下書庫内を、小学校高学年くらいの少年がじつくりと見回していた。綺麗な黒髪の、アジア系の端整な顔立ちをした少年である。

少年は書庫内を見回し終えると、黒真珠のような瞳に不満の色を宿し、呟く。

「魔術師協会『白き明星』が誇る魔書収容庫にしては、蔵書量が少ないな」

「はい。ここにある書物は全て、一級の魔書閲覧ライセンス所得試験に用いられる物です。『白き明星』が所有する蔵書量の数パーセントにすぎません」

事務的に答えたのは、少年の後ろに付き添う形で直立している二十歳前後の女性だった。大学の卒業式などで見られるアカデミックドレスに似たローブを纏い、ショートに切り揃えた金髪に蒼い瞳をしている。

「それで、僕はどれを選べばいいんだ？」

「魔書の選定に関して私は口出しできません。ただ、ご存知かと思われるますが、魔書には魔術書と魔導書の二種類が存在します。部屋の半分手前が魔術書、奥が魔導書の棚になっております。確かあな

た様には魔力の素養がおりでしたので――」

「ああ、だから僕は魔導書しか使えない」

引き継ぐように素っ気なくそう言うと、少年は教えられた通りに奥の棚を目指す。

その途中、女性が感心するような口調で雑談をしてくる。

「それにしても、そのお年で一級試験を受けられるとは驚きです。しかも初めての試験とは信じられません」

「魔書を読むのにライセンスが必要だなんて、面倒なだけだ」

「しかしそうしなければ、過ぎた力に身を滅ぼす魔術師が続出しません」

「わかってる」

部屋の中には魔術書と魔導書の棚を区切るために赤いラインが引かれている。少年はそのラインを跨ぐと、適当に棚から魔導書を漁り始めた。

どれも開けば意味不明な文字がびっしりと羅列されている。どこの国の言語でもない。これらの文字は全て暗号になっているのだ。それを読み解き、理解し、記された魔術を己の意思で使役することが魔書閲覧ライセンスの所得試験における実技である。そして、自ら魔書を選定する『目』も試験では評価されるのだ。

「どれもこれも単純だ」

数時間後、少年は積み上げていた五冊の魔導書をつまらなそうに元の棚に戻した。

「え？ 一級の複雑で難解な魔導書をもう五冊も読み解かれたのですか？」

「そうだが？ ……この辺りは似たり寄ったりだな。おい、もっとマシな物はないのか？」

信じられない、と女性は驚愕に目を見開いた。

「マシな物と仰られましても、ここに置いてある魔書は試験用に抜粋された評価し易い物ばかりですので。一級ですけど」

無茶苦茶な要求にあたふたする女性を、少年は黒い瞳で見上げ、

言う。

「お前もこの案内人を務めているということとは、一級以上のライセンスを持つ魔術師なのだろう？ お前の？書棚？にある物でいい出せ」

「い、一級は一級ですが、お生憎と私はただの魔術師です。？書棚？は当然として、一冊の魔導書も持ち歩いておりません。それに、魔書をご自分で選ぶことも試験の一環ですよ」

チッ、と少年の口から舌打ちが聞こえる。そんな少年の態度に少々苛立ちを覚えた女性魔術師は、さらに奥へと向かう彼を追わなかった。

そしてすぐに、追わなかったことを後悔することとなる。

最奥部の棚を曲がった少年が、『それ』を見つけてしまったのだ。「なんだ、あれは？」

壁に埋め込まれた本棚の一番上の端に、淡く光輝く純白の表紙カバーをした魔導書があった。明らかに他とは存在感が違う。それを、少年は持ってきた梯子を登って手に取った。

その場でページを捲り、ごくつと喉を鳴らす。

「この魔導書、本当に一級なのか？ でも、これを実演できれば逸早く特級になれる」

満足げに笑い、少年は輝く魔導書を解読していく。

なかなか戻ってこない少年の様子を女性魔術師が見にやって来たのは、それからさらに一時間が経過した頃だった。

彼女は少年の持つ魔導書を訝しげに見やった後、さっと血の気が引き、愕然とした表情になる。

「あ、あれは？永劫の器？の魔導書！？　なんで禁書がこんなところに！？」

女性魔術師の声が届いてないのか、梯子の上の少年は真剣に魔導書と睨み合ったまま振り向こうとしない。

「いけない！　早くそれを手離してくださいっ！」

叫ぶと同時に、少年はパタンと本を閉じた。声が伝わったのかと安

心しかけた女性だったが、残念ながらそうではなかった。

少年は、禁書を読み解いてしまったのだ。

瞬間、少年の持つ魔導書から閃光弾のように光が爆発し、地下書庫内を白一色に染め上げた。

「うわああああああっ!？」「きゃああああああっ!？」少年と女性魔術師の悲鳴が重なる。

痛みもなければ熱もない。そのような不思議な光に包まれている時間はほんの数秒ほどだった。

視力が戻るのにさらに数秒。

女性魔術師の視界に映るものは、普段となにも変わらない地下書庫の寂れた風景。

ただし、梯子から落ちたのだろう、少年は仰向けに倒れたまま放心して動かない。それから先程まで彼が解読していた魔導書が、影も形もなくなっていた。

「た、大変なことに……早く報告しないと……」

女性は少年を置き去りにして踵を返すと、螺旋階段を駆け上って地下書庫を後にした。

禁書に手を出したことで少年の精神が崩壊したのだと、勘違いして――。

「うーん？ どうなってるんだろ？」

午前中の授業を終えた昼休み、来栖月葉は教室の窓際にあたる自分の席に腰掛けて難しい顔で唸っていた。

開け放たれた窓から初夏の温もった風が入り、セミロングに伸ばした髪を靡かせる。今日は髪留めをつけ忘れたため、前髪が目の上でチラついて微妙に鬱陶しい。

いつもつけているお気に入りの髪留めを忘れるほど、月葉は今朝から別のことが気になって仕方がなかったのだ。

その『気になって仕方なかったもの』は今、机の上に置かれてある。

本だった。それも辞書のように分厚くて重みのある本である。薄汚れた焦げ茶色の表紙には、アルファベットとは違う見たこともない文字でタイトルが書かれている。世界史の授業で見た楔形文字になんとなく似てなくもない。

月葉は意を決した表情になり、本のページを捲ろうとするが――
「うぐ……あーもう、やっぱり無理かあ」

そう、この本、どうやっても開かないのだ。接着剤かなにかでくっつけられているわけでも、実は本の形をした別物というわけでもない。まるで開こうとすると一ページがトン単位で重くなったかのようにビクともしないのだ。今朝から月葉を悩ませている原因はこれである。

私立凜明高校に入学してから二ヶ月、個人的な悩みを学校にまで持ち込んだことなどなかった。一体、この本はなんなのだろうか。

「やはやは、月葉、さっきから眉間に皺寄せてなにしてんの？」

「せっかくの可愛らしいお顔が台無しになってますよ」

腕を組んで黙考していると、二人の女子生徒から声をかけられた。
「あ、理音ちゃんに依姫ちゃん。えーとね、ちょっと訊いてほしい

んだけど」

「なにかななにかな？ あ、もしかして恋のご相談かい？ ふふん、
だったらばこの理音様にお任せあれ！」

底なしの明るい声で盛大に勘違いしている彼女は、八重澤理音。
整った小振りの輪郭にパッチリとした大きな目、青みがかった長い
黒髪はうなじの上辺りで一つに結わえている。制服のブレザーは見
事に着崩し、丈を短くしたスカートは明らかに校則違反しているが、
週に一度抜き打ちで行われる服装検査にはなぜか一度も引っかかっ
たことのない曲者だ。

「え？ 本当ですか？ 月葉さんにもついに春が来たってことです
か？ お相手はやっぱり椎橋陽さんとかですか？」

丁寧でゆったりとした口調とは裏腹に、瞳を爛々と輝かせて詰め
寄ってきたのは紀佐依姫。肩甲骨辺りまで伸ばした髪をソバージュ
にし、理音とは真逆にきっちり制服を着こなしている。本人があ
まり話さないためよく知らないが、彼女は紀佐財閥のご令嬢——つ
まり大金持ちのお嬢様だとか。

八重澤理音は高校から、紀佐依姫は中学時代からの気の合う友人
だ。

「もう、そんなんじゃないよ。これ！ この本について悩んだの
！」

月葉は机に置いてあった本を両手で持ち上げて友人たちに示す。
二人はまじまじと本を見詰めた後、興醒めしたように肩を落とした。
「ずいぶんと古い本ですね。わたくしのお爺様が喜びそうです。そ
れで月葉さん、この本がどうなされたのですか？」

「開いてみたらわかるよ」

そう言って月葉は依姫に本を手渡す。依姫は恭しく受け取ると、
表紙に細い指をかけて捲ろうとし——固まる。

「……ひ、開きませんね」

「そういうこと」

ぐぐつと力を込める依姫だが、彼女の華奢な手では数ミリたりと

も表紙は持ち上がらない。中学で空手部に所属していた月葉でも無理なのだ（人数合わせの幽霊部員だったが）。

「ふんふん、ちよいと貸してみ依姫。今度はあたしがやってみるよ」と理音が依姫から本を引手繰り、その表裏を探偵のような顔で検分する。

「本当だ。どのページもピッタリくつついちゃってる感じだね」

それから理音はコツコツと本をノックするように叩き、「とりやつ！」と天に放り投げ、ブンブンと高速に振り回したりもする。が、やはり本は捲れる気配を見せない。

それに少々ムツとした様子の理音は、次に本の表紙に手を添え、「開けゴマ！」

秘密の洞窟の扉でも開けるような呪文を恥ずかしげもなく唱えた。

「……」

「……」

「……」

もちろん、開くわけがない。

「フ、フフフ、フフ」

怪しい笑い声が俯いた理音の口から漏れる。どうしたのかと月葉が彼女の顔を覗き込もうとすると――

「うおおりゃああああああああああっ！！」

額に青筋を浮かべた理音が引き裂く勢いで強引に本を捲ろうとし始めた。

「――って理音ちゃんそれ破れる！？ 破れるからやめて！？」

「うるさいうるさい！ こうなったらどうやってでも中を見てやるんだぁーっ！」

「落ち着いてください理音さん！」

月葉と依姫が慌てて止めに入っていないければ、本は四階にある教室の窓から放り捨てられた上、焼却炉にまで運ばれそうだった。

何事かと注目してきたクラスメイトたちに三人で平謝りする。

「それにしても、どんなに乱暴に扱っても傷一つついていませんね。」

不思議な本です」

「もういいじゃん、月葉。捨てちゃいなよそんな本。読むことのできない本に価値なんてないよ。古本屋だって買ってくれないと思うね。汚いし」

ぷいっと本から視線を反らす理音は完全にへそを曲げていた。

「でも、私、どうしてもこの本の内容が知りたくて」

「どうしてですか？」

小首を傾げて訊ねてくる依姫に、月葉は本の背表紙を見せた。

「ほらここ、擦れてるけど『来栖^{くるすめずり}枉葉』って書いてあるよね？　こ

れ、私のお母さんの名前なんだ」

「月葉のママって確か、十年くらい前に死んだんだっけ？」

「理音さん、言葉がストレート過ぎです」

「あ、ごめん」

「いいよ、別に。数えるほどしか会ったことなかったし」

来栖枉葉――月葉の母親は、海外で作家活動を行っていて家には滅多に帰って来ない人だった。取材中になんらかの事故に巻き込まれて亡くなったらしいが、当時五歳だった月葉にはかろうじて名前を知っている遠い親戚が亡くなったのと同じ感覚だった。

父親曰く、優しくて綺麗でカッコいい、生まれ変わったならもう一度出会って結婚したい人だそうだ。確かに写真で見る母親はその辺の女優よりも綺麗だった。そんな人と結ばれたのだ、父親が再婚しないのも頷ける。

「私、お母さんの書いた本って読んだことも見たこともないんだよね。たまたまうちの倉庫でこれを見つけて、なんか気になっちゃって。お父さんも知らないって言うし」

今さら母親のことを知りたいと思うのは、遅いかもしれない。けれど、自分をこの世に誕生させてくれた人が残したものを気にならないと言えは嘘になる。

たかが本であるが、これはただの本ではない気がするのだ。いやどうやっても開かない時点でただの本とはいえないけれど、なにか

自分に訴えかけているような、そんな不思議な感覚を月葉は覚えていた。

「じゃあさ、あいつに訊いてみる？　もしかするとなにかわかるかもしれないよ？」

理音が人差し指を立ててそう提案してきた。彼女のなにかを企んでいるようなニヤ顔には『名案』と書かれてある。

「あいつって、誰のこと？」

「あいつだよ、あいつ。ほら、いつつオカルト系っぽい怪しげな本読んでる顔はいいけどネクラな奴」

「是洞真夜さん、ですか？」

依姫が微妙な表情をする。その名前は月葉も知っている。というか、クラスメイトだ。

理音の言う通り、常にどこの国のものとも知れない分厚い本を持ち歩いている男子生徒。無口無表情で人を寄せつけない雰囲気があるので、月葉は一度も会話したことがない。

「そういえば、是洞くんの持つてる本って私の本と似てるような……」

注意して観察したことなどなかったので記憶はあやふやだけれど。「でしょでしょ！　訊いてみる価値はあるって。昼休みだから、たぶん図書館にいるはずだよ」

楽しそうに言いながら理音は月葉の手首を掴むと、「レッツゴー♪」と掛け声をかけて歩き始めた。依姫もとりあえずといった様子でついてくる。

引っ張られる月葉は、つんのめりながらも理音に抗議することにした。

「ちょ、べ、別にそこまでしなくてもいいよ」

「月葉はどうしても本の内容を知りたいんですよ？　あたしだって同じ気持ちだよ。絶対に開いて復讐を遂げてやるんだからフフフフ」

またも地の底から響くような笑いを漏らす理音に、なにも言えな

くなる月葉だった。

凜明高校の図書館は、教室棟から総合体育館へ繋がる渡り廊下の途中にある。

体育館と同等の大きさを持つ丸っこいドーム状の建物がそれだ。一階と二階、さらに地下にまで本が詰まっているため、街の市立図書館よりも蔵書の量が多いという。

入口の自動ドアをくぐると、まず広々とした空間が視界に飛び込んでくる。二階は一部が吹き抜けになっており、天井のスカイライト・ウィンドウから日光が差し込んでいるため照明をつけなくても充分に明るい。

一階部分は壁に沿って本棚が並び、手前側には読書のためのテーブルと椅子がいくつも設置されている。奥側にはやはり本棚が所狭しと林立していて、受付横の検索機がなければ一冊の本を探し出すために相当な努力が必要そうだ。

「(ほらほら、やっぱりいた。是洞真夜、噂通りの本の虫だね)」
図書館では静かだというルールに則り、理音が声を潜めて月葉に目配せした。

最も奥の端に位置するテーブルに、ぽつんと一人だけ男子生徒がいる。

是洞真夜。耳にかかる程度に伸ばした混じりけのない綺麗な黒髪に、線の細い端正な顔立ちをした美男子だ。目や眉はやや吊り上がっていて人相悪く見えるけれど、その少し不良じみた部分に惹かれる女子もいるとかで密かに人気があるらしい。月葉にはよさがさっぱりわからない。

国語の先生が朗読の指名を避けるほど、彼は孤独オーラを全開にしているのだ。関わりたくないなんて一ミクロンほども思ったことはない。

ついさっきまでは……。

「（ほらほら、早く行きなつて月葉。当たって砕けろだあ!）」

「（月葉さん、その、頑張ってください。ファイトです）」

「（え?　なんで今から私が好きな男子に告白するみたいな雰囲気になつてゐるの!?)」

二人に背中を押されて月葉は男子生徒――是洞真夜がいるテーブルへ恐る恐る歩み寄る。

足を組み、椅子の背凭れに背中を預け、片手で分厚い本を持っているその姿は、天窓からの日差しのせいどころなく神秘的な空気を纏っているように錯覚してしまう。

「あとう、是洞くん、ちよつといいですか?」

月葉は控え目に声をかけた。なんか向こうで理音が「なぜに敬語!?」と叫び図書委員に怒られているが、今は無視しておく。

「……」

是洞真夜はただ無言で本を見詰めている。集中していて声が届かなかったのだろうか。そもそも、目の前にいる月葉にすら気づいていないのかもしてない。

「あとう、すみません。聞こえています?」

「……」

「もしもーし、是洞くん?」

「……」

「あ、その本、少し破れてますよ?」

「……」

興味を引きそうなことを口にしてもまったくもって反応がない。

ふう、と息をついた月葉は、離れたテーブルにいる理音と依姫を振り向き――

こ・れ・等・身・大・の・精・巧・な・お・人・形?

身振り手振りとアイコンタクトでそう伝える。

すると理音から同じようにジェスチャーで返信が来る。

生・き・て・る・か・ら！ ペ・ー・ジ・捲・つ・て・る・か・ら！

「だよねえ」

溜息交じりに呟く。しかし話しかけても応えてくれないとなると……蹴り飛ばすという恐ろしい提案が月葉の脳裏を過った。

と、その時――

「僕の前で気持悪く躍るな。目障りだ」

本をテーブルに置き、是洞真夜が刃物のような視線を向けてそう言ってきた。彼の声はあからさまな苛立ちの色を含んでいる。

月葉は目を丸くする。

「声、初めて聞いた――じゃなくって、気持悪いってなによ！ いきなり、それも女の子に向かって失礼じゃないかな！」

「知るか」

一言でバツサリと切り捨てられた。なんなんだこの人は、と月葉の彼に対する第二印象は推進エンジンを積んで悪い方向にぶっ飛んでいる。

「もしかしてだけど、是洞くん、最初から私のこと気づいてた？」

「向こうの二人と図書館に入ってきた瞬間から気づいていた」

「なんで無視したの？」

「めんどくさいから」

しれっと答える是洞真夜。月葉は、うぐぐ、と苛立ちを堪えるために両拳を力強く握った。

――なんなのこの人！ すつつつごくムカつく！

これはもう諦めて帰った方がいいかもしれない。そう本気で考え、無言で踵を返して立ち去ろうとした時――

「で、僕になんの用だ？」

意外なことに、是洞真夜が引き止めてきた。振り返った月葉は彼を半眼で睥睨する。

「めんどくさいんじゃないですか？」

ここで敬語に戻ったのは心の距離を置くためである。

「わざわざ僕に話しかけるような人間は少ない。それなのにお前は僕の気を引こうと変な躍りまでやったんだ。なにか訳があるんだろう？　話くらいは聞いてやる」

「あ、あれは別にあなたの気を引くためにやったわけじゃありません！」

それなら最初から無視なんてしなければ、月葉がここまで不快な思いをしなくてもよかったのだ。やはり「もういいです」と断って帰るべきかもしれない。

「その本が、関係しているのか？」

ビク。

的のど真ん中を射た彼の言葉に、月葉の肩が微かに跳ねる。彼は月葉が背中に隠していた『開かずの本』にもきちんと気づいていたのだ。

月葉はテーブルに置かれてある彼の本を見る。月葉の本と同じくらしいの厚さに、楔形文字に似た表紙のタイトル。なにかもがそっくりだ。

可能性が生じる。彼ならこの本について本当になにか知っているかもしれない、と。

彼の無礼に対する怒りよりも、母親の残した本について知りたいという気持ちが勝った。

「この本、どうしても開かないの。なにか不思議な力が働いてるみたい」

敬語を取りやめて本を手渡す。受け取った是洞真夜は適当に本の全体を見回し、背表紙の辺りでなにかに反応したように眉を顰める。「来栖杠葉、か。なるほど」

全てを悟ったように本を返してくる。彼の本の扱いは月葉に対する言葉遣いよりも遥かに丁寧でいて慎重だった。余程に本が好きなのだろう。

「是洞くん、なにかわかったの？」

問いかけてみるが、彼はシカトして椅子の脇に置いてあった学生カバンからボールペンとメモ用紙を取り出す。それからサラサラサラとメモ用紙に文字を書き込み――

「放課後、そこに書かれてある場所へ来い。ここで話の続きをするわけにはいかないからな」

そう言って月葉に押しつけるように渡すと、彼は図書館を去っていった。

「なんなのよ、もう」

メモ用紙には、どこかの住所が記されていた。

市の商店街から僅かに反れた裏通りのさらに奥。自転車がぎりぎりで通れるほどの狭い路地を抜けた先がメモ用紙に書かれている住所だった。

午後の授業を追えた月葉は、特に部活動などはやっていないためまっすぐにそこを目指した。理音と依姫は用事があると言って校門前で別れたので、今は一人である。こんな怪しげな場所に単身突撃させるなんて薄情な友人たちだ、と心中で冗談半分に愚痴ってみる。「ここで、いいんだよね？」

誰にともなく呟き、月葉は目の前にある建物を見上げる。木造建築の大きな屋敷が堂々と構えていた。築五十年はあろうかという古風な雰囲気醸し出しているそこは――

「是洞古書店？」

玄関の大きな扉の上にある看板に、そう書かれてあった。

「まさか売れてること？ あーでもでも、『是洞』ってことは……自宅？」

月葉は屋敷の前をうろうろして様子を見ることにした。広めのガラス窓から窺える一階部分がどうやら書店になっているらしく、古い学校の図書室みたいな趣がある。一階に対して比較的窓の少ない二階部分は、恐らく自宅になっているのだろう。

屋根に留まった三羽のカラスが、月葉を威嚇するように「カー！」と鳴いた。

――な、なんかコワイ。

そこまで寂れてはいないが、幽霊屋敷と言われたら信じてしまいそうな建物に恐怖心が沸き起こってくる。だが、このまま観察していてもこれ以上のことはわかりそうにない。変質者と思われるのも嫌なので、月葉は勇気を出して店の両開きの扉に手をかけた。

キイイイイ。

扉を開く時の古めかしい音がホラー映画を連想させる。時間帯が夜中だったら迷うことなく逃げ出している月葉である。

「……お、おじゃましーす」

薄暗い店内に月葉はオドオドしながら足を踏み入れる。古本独特の臭いが充満している店内には、誰もいない。月葉が背伸びしても一番上には届きそうもない本棚が、どうにか人の通れる隙間を残して並んでいるだけだった。

そんな静謐極まる店内に――カタカタカタカタ。

プロの料理人が野菜を刻む時に似たりズムで、アニメとかに出てくる骸骨の効果音みたいな音が響く。

ひっ、と漏れそうになる悲鳴を堪え、音が聞こえる方向を振り向くと――

「だあああああああ纏まんないいいいいいいいいいっ!!」

「ふひゃあああああああああああああああああッ!？」

突然の大声に、腰が抜けた。

「あら？ お客さん？ ごめんなさいね、気づかなかったわ――って、大丈夫？」

L字型の会計台の後ろから、艶のある漆黒の長髪を纏めることななくストリートに下ろした女性が身を乗り出してきた。アルバイトの大学生だろうか、年齢は二十歳前後と思われる。スラリと背が高く、モデルとして雑誌に載っているようなプロポーション。同性である月葉から見ても文句のつけどころのない美人だ。つつい羨望の眼差しで眺めてしまう。

「あわ……あわわ……」

腰さえ抜けていなければ。

「あはははっ、ごめんごめん、驚かせちゃったみたいね。ほら、立てる？」

ペタンと床にへたり込む涙目の月葉に、会計台を身軽に飛び越え

た女性が優しく手を差し伸べてきた。

「あ、はい。……なんとか」

その手を取ってふらつきながらも立ち上がり、汚れたお尻を叩いてスカートを正す。

「それにしても可愛らしいお客さんね。ウチの弟と同級生くらいかしら？ 制服も凛明のブレザーだし」

薄暗い店内を照らすような明るい笑顔で、女性が月葉を品定めするように見詰めてくる。均整の取れた輪郭に目鼻口が芸術的なまでに配置されていて、ファンデーションすら使っていないらしい白い肌には染みも雀斑も見当たらない。着ているTシャツやジーパンはヨレている上に安物のようだが、それを含めても綺麗な人だということとは変わらない。

「えっと、店員さんですよ？ なにをされていたんですか？」

オバケじゃなかったことに月葉は胸を撫で下ろしつつ、気になったので訊ねてみた。

「ん？ ああ、ちょっと副業をね」

女性はどこか照れ臭そうにしながら会計台の裏に回り、椅子に座る。それから台に置いてあったノートパソコンの画面を月葉に見せてきた。先程の音はキーボードを叩く音だったようだ。

画面には日本語で書かれた文字が縦書きに綴られていた。

「これ、小説ですか？」

「うん、そう。だけど原稿の締切近いのに全っ然話が纏まらなくてね。つい苛立って叫んじゃったのよ。ホント、驚かせてごめんなさいね」

「べ、別に気にしてないです。こちらこそ、変な声上げちゃってますみません」

ペコペコと頭を下げる月葉に、女性が苦笑を返す。

「それで、この知る人ぞ知る是洞古書店になにか用？ 本探しだったらタイトル言ってくればどこにあるのかすぐに教えられるけど？ あ、漫画や小説は少ないわよ。ほとんど私が頂いちゃってるか

ら」

「いえ、そうじゃなくて。この本を――」

「売りに来たのね。オーケーよ。古書店だから買い取りもちゃんと行ってるわ」

月葉の言葉は遮られ、カバンから取り出した例の本もスリのような早業で引っ手繰られた。

「本に関してウチはケチつけないからね。物によってはそれなりに……」

月葉から引っ手繰った本を見るや否や、女性は瞠目して時間が止まったかのように数秒間停止する。

そして――

「あなた、魔術師だったの？ ライセンスランクはいくつ？」

よくわからないことを口にした。

「……へ？」

――マジユツシって……なに？

今度は月葉が呆然とする番だった。

「あっちゃー、その反応からして違ったみたいね。ごめん、今の忘れてくれる？」

うっかり機密を漏らしてしまったという様子で女性はおでこに手をあててそう言うってくるが、聞いてしまったものは覆せない。月葉の口は自然と疑問を声にしていた。

「マジユツシって、あの魔術師ですか？」

「ああ、やっぱり忘れてくれないわけね。そりゃそうよね。一般人にとってはインパクト大だもんね」

椅子の背凭れに全体重を預けてぶつぶつと呟いた女性は、開き直ったような顔つきになって月葉をまっすぐに見据えてきた。

「そう、その魔術師よ。あなたがイメージしたもので大まかには合ってると思うわ。あ、でも？魔法使い？は行き過ぎよ。箒に乗って

空飛んだり、呪文唱えるだけで火の球出したりできるわけじゃないの。そういうことするにしても、いろいろと準備しなければいけないのが私たち？魔術師？の面倒なところ」

月葉は思いつ切りその？魔法使い？を想像していた。三角帽子と黒ローブを纏った老婆が箒に跨っているイメージを脳内から追い出し、訊ねる。

「私たちってことは、お姉さんも？」

「そうよ。私はなにを隠そう、魔術師協会『白き明星』公認の一級閲覧ライセンスを持つ凄腕魔術師なのよん」

語尾をふざけた感じに碎き、ウィンクまでする女性。この微妙に張り詰めた空気を緩くするためだろうが、正直、月葉にはなにがなんだかさっぱりわからない。魔術師はまだいい。信じているわけではないけれど、言葉の意味は理解できる。しかし、『白き明星』やライセンスといった単語は意味不明過ぎて頭の中で混沌の渦を巻いている。

この人が今執筆している小説の設定ではないのか、そう思う。

「信じられないって顔してるわね。別にいいわよ、信じなくて。この話はここで終わり。それよりこの本、どうも売りに来たってわけじゃなさそうね」

彼女の言葉に月葉は自分がここへ来た目的を思い出す。魔術師がどうのこうのという話は、月葉にはどうだっていいことなのでひとまず横に置いておく。気になるけれど。

「えっと、実はその本なんですけど――」

月葉はどうしても開くことのできない不思議な本のこと、それを見せた是洞真夜にこの店の住所を教えられたことなど、ここに至る経緯を掻い摘んで説明した。

黙って聞いてくれていた女性は、ふうん、と思案顔になる。

「なるほどねえ、ウチの真夜がねえ。そういうことなら依頼は『鑑定』ってことでいいのかしら？」

「あ、はい。たぶん。――って、ウチの真夜？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？」女性はキョトンとし、「私は是洞日和^{れとうひより}。この店の店主で、是洞真夜のたった一人のお姉ちゃんよん」また碎けた調子で自己紹介してきた。言われてみれば、綺麗な黒髪といい、どこことなく是洞真夜に似てなくもない。性格は全然違うけれど。

それに店主。てっきりアルバイトの人かと思っていた月葉は急激に恥ずかしさが込み上がってくるのだった。

「あ、あの私、来栖月葉です。その、よろしくお願いします！」

赤面した顔を隠すために頭を下げる月葉。すると女性――是洞日和は「ぷふう」と噴き出すように笑った。月葉の羞恥心ゲージがさらに上昇する。

「あはははっ。そんなに畏まらなくていいわよ、月葉ちゃん。面接じゃあるまいし。それじゃ、さくつと鑑定しちゃうわね」

ぐぐつ。日和は早速手に力を入れて本を開こうとしたが、魔術師と名乗っていた彼女でも開くことはできそうにない。魔術師なら魔術でもなんでも使えばいいのでは？ と皮肉めいたことを思いながら、月葉は鑑定の様子をぼーっと眺める。

「ふふっ。これはなかなか、強敵だわ」

唇を斜に構えて日和は呟くと、コツコツと本をノック。続いて上方に放り投げたり、ぐるぐると振り回したりして本に軽い衝撃を与えようとする。

それからおもむろに立ち上がると、会計台へ置いた本にビシッと指を突きつけ、

「ちちんぷいぷい！」

怪我した子供を宥める時のおまじないみたいな呪文を唱えた。

「……」

「……」

当然のごとく、本にはなんの反応もなかった。

――あれ？ デジャヴュ？

月葉は思わず苦笑した。日和の行動は理音に本を見せた時の流れ

にそっくりだ。

「うーん、参ったわね。中身が見れないことには判断のしようがないわ」

柳眉を寄せた困惑顔で日和は本の表紙、裏表紙、背表紙という順にチェックしていく。どうでもいいけれど、そういうことは普通振り回す前にやるものではなからうか。

「ん？ 来栖杠葉って……まさか、あの来栖杠葉！？」

背表紙の擦れた作者名を読み取った日和が目を見開いて素っ頓狂な声を上げた。

「お母さんを知ってるんですか？」

「知ってるものにも、来栖杠葉って言えば魔術界では有名な魔書作家よ！ 十年前に亡くなったって聞いてたけど、こんなところで彼女の魔導書にお目にかかれるなんてテンション上がるわぁ！」

キヤー！ なんて黄色い奇声を発して瞳をキラッキラと輝かせる日和。体を気持悪くくねくねさせて本当にテンションがおかしな方向へ振り切れている。それほどまでに月葉の母親の本は彼女にとって珍しく貴重な物だったのだろう。

それはともかく——また胡散臭い単語が飛び出してきた。

「ま、魔導書ってなんですか！ これそんなに怪しい本だったんですか！」

「あれ？ 月葉ちゃん、さっき『お母さん』って言った？ ということはなに？ 来栖杠葉の娘さん？ そういえば苗字、来栖だったわね」

日和は月葉の質問など聞いちゃいなかった。

「でも月葉ちゃんは魔術師じゃないんだよね。そういうことは教わらなかったってこと？ 意外ねえ。絶対に才能受け継いでると思うのに、なんか勿体ないわ」

「日和さん！！！」

バン！ 月葉は両手で会計台を強く叩いた。

それにパチクリと目を瞬かせた日和は、どうやら跳ね上がってい

たテンションが急激に醒めてしまったようだ。月葉の狙い通りである。

「魔導書ってなんですか？　これ、そんなに怪しい本だったんですか？」

先程と同じ質問を月葉は幾分か落ち着いた口調で繰り返した。

「そうね。月葉ちゃんが本当にこの本について知りたいって言うのなら、私たちのことをまず？　信じて？　もらわなきゃいけないわ」

「信じるって……？」

是洞日和が凄腕の魔術師である、と信じるということだろうか。

そんな荒唐無稽な話、信じる信じないの前に理解ができない。月葉は人を疑うことを知らない無垢な子供ではないのだ。実際にこの目でその『魔術』とやらを見なければ話にならない。

「そういうことだから、月葉ちゃんにも付き合ってもらおうかな。ちょっと待ってて」

日和は後ろの壁に設置されていた電話の受話器を取り、ボタンを押してどこかにかける。たぶん、内線だ。

「……あ、マヨちゃん。準備できてる？　んもう、怒らないでよ。

準備できてるならすぐに出発するわよ。あ、それとお客さん来てるから」

それだけ言うと、日和は受話器を戻して通話を切った。

——マヨちゃん？

恐らく他の店員だろう。お客がいらないとはいえ、流石に店員が日和一人というわけはあるまい。

待つこと数分。会計横にあったドアが静かに開け放たれ——

「……フン、やはり客というのはお前か」

不機嫌そうな顔をした是洞真夜が現れた。

「え？」

月葉はポカンとした。彼は私服ではなく学校の制服のままで、ポケットに手なんか入れて月葉を見下すような目で見ている。自分でここへ来るようにメモまで渡しておきながらにその態度！　と怒

鳴ってやりたかったが、月葉の口は別の言葉を紡いでいた。

「……マヨちゃん？」

真夜を指差し、日和を見る。日和はニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべていた。

「僕をそんな気持悪い名前と呼ぶな。鳥肌が立つ」

「『真夜』は『マヨ』とも読めるでしょ？ 女の子だったらそうな
ってたらしいのよ」

「僕は男だ」

真夜の苛立ちが三割ほど増したような気がした。刃物のような目つきで睨まれたが、そんな可愛いあだ名を知ったからには全然怖くない。女装させたら似合いそうだなあ、と余計なことまで考えてしまう月葉である。

フン、とマヨちゃん、もとい是洞真夜は鼻息を鳴らす。

「悪いが、急な依頼が入った。お前の本についてはその後だ」

「あー、それなんだけどね、真夜。彼女も一緒に連れて行こうと思うの」

「は？ 正気か、姉さん？」

真夜が無表情を少し嫌そうに歪める。いちいちこちらの神経を逆撫でしてくる態度だ。しかしそんな捻くれ者が『マヨちゃん』……可笑しくてついニヤけてしまいそうになる。

「私は正気よ。どの道、彼女には魔術師や魔書について講義しなきゃいけないでしょう？ 手間が省けるじゃない」

「それはそうだが、姉さんもついてくる気か？」

「あら？ 月葉ちゃんと二人きりになりたいの？」

「無理です！」

反射的に月葉は叫んでいた。こんな無礼が人の皮を被って本読めるような奴と二人きりになった日には、気まず過ぎる空気に堪え切れず押し潰されてしまう。

そんな月葉に二人ともノーコメントで、何事もなかったかのように会話を再開する。

「店に誰もいなくなる。先月空き巣に入られたことを忘れたのか？」
「一般のお客さんなんて滅多にこないから大丈夫よ。空き巣だって、あの時より防犯術式を強化したから今度入ってきたら返り討ちにしておやるわ」

「小説は？ 締切が近いんじゃないのか？」

「息抜きよ、息抜き。それに私が行かないと誰が月葉ちゃんに解説するのよ？」

くっ、と真夜は押し黙った。確かに彼は人になにかを教えることは苦手そうだ。

無口無表情で人を寄せつけないあの是洞真夜が、家族とはいえこんなに会話をしている。そのことに新鮮さを感じながら、月葉はずつと気になっていたことを訊ねた。

「あの、日和さん、さっきからどこへなにをしに行く話してるんですか？」

「ふふふ、それはね——」

日和は勿体ぶるように少し間を空け、またも砕けた調子で言う。

「——魔導書の出張買い取りよん」

店の裏手を少し行くと、閑散とした狭い駐車場があった。そこには『是洞古書店』とロゴの入った白いMRワゴンが停められていて、月葉は流されるままに後部座席へと乗せられてしまった。

日和が運転席であることは当然として、真夜は助手席に腕を組んで座っている。どこへ向かうのか問うと、「ついでからのお楽しみよん」と秘匿された。たぶん、意味はない。

「別に、車で行く距離でもないだろう」

走行中、真夜が不満そうに呟いた。気のせいか、若干顔色が悪いように思える。

「いいでしょう、楽なんだし」

「ガソリン代の無駄だ」

「練習しないと運転できなくなっちゃうでしょう？」

日和は真夜の文句をどこ吹く風といった様子で受け流していた。

ほどなくして、月葉たちを乗せたワゴンは高級住宅地の一画にある一際大きな屋敷へと到着した。

日和が警備員と話をつけて門を開けてもらい、車のまま中に入る。そこにはゴルフ場でも造れそうな面積の庭園が広がっており、本館と思われる洋風の建物へ辿りつくまで五分の時間を要した。

玄関先に邪魔にならないよう車を停めて外へ出ると、月葉は視線を上に向ける。

「うわぁ、凄い」

絵に描いたような大金持ちの豪邸を目にした月葉の第一印象がそれである。嫌味のない白い壁に荘厳な雰囲気、思わずこの場から見える窓を数えてしまうほど広い。洋館と言うよりは宮殿と言った方がしっくりくる。

「（……車……なんて……なくなればいいんだ……）」

ふと隣を見ると、出発時よりも青い顔をした是洞真夜がぶつぶつ

と小声で呪いの言葉らしきものを呟いていた。

「是洞くん、大丈夫？」

「……」

「もしかして、車酔い？」

「……うるさい」

正解のようだ。だから車内で散々文句を並べ立てていたのか、と月葉は納得する。学校ではロボットみたいに感情が動かないから、なんか面白い。

気分が優れないのに無理して立っている真夜に月葉がくすつとしている――

「あら？ 月葉さん？」

丁寧でゆったりとした、毎日のように聞いている声が耳に届いた。見ると、緩く波打つソバージュの髪をした少女――紀佐依姫が、恰幅のいい老年の男性と共に豪華な玄関扉から出てきたところだった。

「依姫ちゃん！？ え？ どうしてここに？」

「どうしてと言われましても……」

困惑顔で小首を傾げる依姫は、学校の制服から白を基調としたノースリーブのワンピースに着替えていた。清楚なイメージのある彼女には凄く似合っていて、まさにお嬢様といった感じである。月葉ではとても着こなせそうにない。

「ここ、わたくしのお家ですし」

「えっ」

ということとは、この豪邸は紀佐財閥の物ということになる。月葉は素直に驚いた。依姫とは中学からの付き合いだが、私服を見たことはあっても屋敷に招待されたことはなかったのだ。

「月葉さんこそ、どうして是洞さんたちと一緒に？」

「えっと、これには私もよくわからない事情があって」

煮え切らない月葉の回答に、依姫は頭上に『？』を浮かべる。

「依姫、知り合いかね？」

とその時、依姫と一緒に歩いてきた老爺が人のよさそうな笑顔で訊ねてきた。

「あ、はい、お爺様。わたくしのお友達の来栖月葉さんです」

依姫の簡単な紹介に合わせて月葉も軽く会釈する。と、なにが嬉しいのか老人は「おお、そうかそうか!」と上機嫌になって歓迎するように両手を広げた。

「孫の友人が訪ねてくるなんて初めてのことじゃ。どれ、今夜は派手にパーティーでもするかの?」

「もう、お爺様。そういうことはやめてください」

依姫は自分が大富豪であることをあまり話したがらない。その理由を月葉は以前に聞いたことがあった。彼女は周りに大金持ちのお嬢様ではなく、対等な存在として接してもらいたいそうだ。月葉や理音はそんなことで態度を変えたりしないのだが、きつと、そうではない人の方が多いのだろう。

「お取り込み中のところ悪いんだけど、紀佐財閥会長の紀佐桐吾さんで合ってるかしら?」

日和が商売人とは思えないフランクな口調で割り込んできた。彼女は金持ち相手だというのに全く怯んでいない。

「いかにも、儂が紀佐桐吾じゃが……貴女も孫の友人かね?」

「いいえ、違うわ。私たちは是洞古書店の者よ」

きっぱりと否定し、日和は営業スマイルを浮かべてそう名乗った。

「おお、そうか貴女が」紀佐桐吾は『待ったました』と言うように、

「いやはや、まさかこんな若くて綺麗な方が来るとは思わなんだ」

「ふふ、誉めてもなにも出ないわよん?」

なんて言っているが、日和は満更でもなさそうだった。なんか隣で真夜が「性格はガサツだがな」と姉に聞こえないようにぼやいている。月葉はバツチリ聞き取った。

「わざわざお越しいただき申し訳ない。本来なら儂らが店まで出向くべきなんじゃが、訳あって本を持ち出せない状態での」

「それは構わないわ。早速だけど、売りたい本っていうのはどこに

あるのかしら？」

「ふむ、こっちじゃ。屋敷の裏にある農専用の倉に保管しておく」
そう言って桐吾は屋敷を周回するように歩き始めた。彼の後ろを日和と真夜もついていく。

依姫が月葉を見る。

「月葉さんはどうなされます？ わたくしのお部屋にでもご案内しましょうか？」

「ううん、依姫ちゃん。私は――」

「なにしてんの月葉ちゃん！ 置いてくわよー！」

上半身を捻ってこちらを向いた日和が大声で月葉を呼んでいる。
並んで歩く真夜は迷惑そうに指で耳栓をしていた。

「そういうことだから、私も行かなくちゃ」

「わかりました。では一緒に参りましょうか。わたくしも、これから起こることに興味がありますから」

「え？」

依姫の意味深な台詞を訝しく思った月葉だったが、再度日和から督促の声がかかったため疑問は一旦横に置いておくことにした。

タタタツと駆け足で三人の後を追う。

――一体、この先になにがあるんだろう？

チラリと横目で依姫を見る。普段と変わらない柔らかな表情をしているが、彼女は月葉よりも先に進んだなにかを知っている、そんな風に思えた。

倉へ向かいながら、月葉は『売りたい本』について訊いてみた。

「お爺様は古書コレクターなのです」

依姫が世間話をする感覚でそう答える。

「古書コレクターって？」

「世界中の初版本や限定本、絶版になった古い書物、そういった稀覯本を集めることが趣味の人のことですよ。お爺様の書庫には三千冊を優に超える珍しい本が大事に保管されています」

三千冊と聞いて月葉の目が点になる。小規模な図書館くらい造れそう。

「わ、私にはわからない趣味かな」

「同感です。全部読めもしないのに、集めるだけで満足する気持ちにはわたくしにも理解できません」

孫の依姫にはっきりと趣味を否定され、たはは、と先頭を行く桐吾は苦笑いを漏らした。

「つい先日のことです。お爺様がどこかのオークションで落札した大量の古書の中に一冊、いわゆるつきの本が混ざっていたのです。『売りたい本』とはそのことですよ」

「い、いわゆるつき……？」

「はい。その本を持っていると、青白い光を放つ怪物に喰い殺されると言われているのです。わたくしが調べたところ、確かにこれまでの所有者は例外なくなんらかの事故でお亡くなりになられています。ミステリアスでとても興味深い話だとは思いませんか？」

「う、うん」

依姫は笑顔で語っているが、月葉は自分から血の気が引いていくのを自覚せずにはいられなかった。そういう怪談話は得意ではないのだ。

「光る怪物かどうかはわかりませんが、倉を掃除していた屋敷の使

用人も二名、人魂のようなものに襲われて軽傷を負っています。おかげで倉へ近づくことができなくなりましたが、本日は専門家の方がいらっしゃるとのことです。こうしてお供させていただきます。まさかそれが是洞さんだとは予想外でしたが、一体どのようなことをなさるのでしょうか？ ああ、凄く楽しみです！ 気になりませんか月葉さん！」

「え？　なんか依姫ちゃん、テンション上がってない？」

いわくつきの本を語っていくに連れて依姫の語気が強くなっている気がした。いや、気のせいではない。彼女は胸の前で祈るように手を組んで恍惚とした表情をしている。

「そうそう、凜明高校にも不思議な話がたくさんあることを月葉さんはご存知ですか？　どこにでもある学校の七不思議みたいな陳腐な話ではありませんよ。図書館にある謎の地下室、秋に咲く中庭の桜の木、特別教室棟屋上に描かれた巨大魔法陣、わたくしもまだ全てを知っているわけではありませんが、これらは実在するものです。一つ一つを想像してみるだけでドキドキしてきませんか？　時間を見つけて徹底的に調べてみたいです。ああ、名門女子校を蹴ってまで凜明に入学した甲斐がありました♪」

「あ、あの、もしもし？　依姫ちゃん？」

依姫と付き合い始めて三年と少しになるが、月葉はこれほど輝いている彼女の顔を見たことがない。

——依姫ちゃんって、もしかして……。

「わたくしはいずれ、世界中の超自然的な不思議に触れてみたいと思います」

——オカルトマニア？

「よろしければ、その時は月葉さんもご一緒しませんか？」

「えーと、私は遠慮しとくよ。あはは……」

月葉は若干引いていた。引き攣った笑みが元に戻らない。別に依姫がオカルト好きだからといって友達をやめることにはならないが、その趣味だけは古書コレクターよりも合わない自信がある。

「あつ……すみません、月葉さん。わたくしついたらつい。このことは学校では内緒にしていってもらえませんか？　その、変な子と思われたくないの」

「うん、大丈夫。言い触らすようなことはしないよ」

彼女の意外な一面を知ってしまい動揺が隠せない月葉だったが、同時に得心もいっていた。お嬢様で頭もいい依姫がどうしてそこまで偏差値の高くない凜明高校に入学したのか、ずっと疑問に思っていたのだ。「月葉さんと離れ離れになりたくないからです」なんて嬉しいことを言ってくれていたが……たった今、本音を聞いてしまった。

「凜明高校は魔術師が創設した学校だからねえ。魔術的な施設や設備が未だに残ってるのよ。私が在学中に全部暴いてやろうとしたけど、流石に謎の数が多過ぎて叶わなかったわ」

いつの間にか月葉の隣に並んでいた日和が昔を懐かしむように絡んできた。

「そういう噂は私も多少は聞いたことがありますけど——って、日和さん、OGだったんですか!？」

「そうよん。私は月葉ちゃんたちと入れ替わりに卒業したのよ」

「へ、へえ」

もっと年上だと思っていた月葉は張り倒されても文句は言えない。「まあそんなことよりも、月葉ちゃんが紀佐財閥のお嬢様と友達だったなんて驚きだわ。——どうも、紀佐依姫ちゃん。私は是洞日和あそこのムスツとした可愛くない坊主のお姉ちゃんよん。よろしくね」

「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

簡単に挨拶を交わす日和と依姫。「今後とも当古書店をご贖員にしてねえ」と日和が媚びるように付け足すと、依姫は困ったような顔で生返事をしていた。たぶん、こういう人がいるから依姫は家柄のことを話せないのだ。

と、月葉は前を歩く真夜がこちらを鬱陶しそうな目で見ているこ

とに気がついた。

「是洞くん、どうかした？」

訊くと、ぷいっと顔を前に反らされる。月葉は少しムカツとした。「ほーら、真夜も会話に混ざりなさい。ずっとだんまりだと存在感なくなるわよー？」

「フン、そんなものなくて構わん。だいたいキャーキャーうるさいんだ、お前たちは」

相も変わらずつれない態度の真夜に、日和はやれやれと肩を竦めるのだった。

女子三人でたわいのない談笑を始めてから約三分、屋敷を半周したところで桐吾が立ち止まり、前方を指差した。

「あれが例の本を保管しておる倉じゃ」

そこには常緑樹の林を背景に中規模アパートくらいの建物が鎮座していた。『倉』と表現するほど薄汚れた感はなく、寧ろ誰かが普通に暮らしていそうな『家』に近い構築だった。

「あそこはお爺様の書庫にもなっているのです」

と、依姫。あれが書庫なら一般庶民たる月葉の自宅なんてウサギ小屋だ。

「……なんか、嫌な感じしない？」

先程まで気持ちよく晴れ渡っていたのに、見上げると分厚い暗雲が立ち込めている。そのせいか、一軒だけ佇む倉が不気味な雰囲気纏っているような気がした。

不安になる月葉だが、一人立ち止まって引き返せるほど空気を読めない人間ではない。内心ビクビクしながら皆について歩き、倉の入口まで残り十メートルを切ったその時――

「下がれ」

真夜が一言でそう命じた。彼の表情は特に変化していないが、その声は陰呑な色を孕んでいた。

「はいはい、みんなあと三メートルほどバックして」

「日和さん、なにが始まるんですか？」

「うん、後で説明するから今はとにかく下がって」

日和に促され、月葉たちはわけがわからないまま真夜を残して後退する。

次の瞬間――バリバリズドン！！

耳を劈くような激しい雷鳴と共に、一本の青白いプラズマが書庫となっっている倉を貫通した。

「きゃっ!？」

反射的に目を閉じ縮こまる月葉。少し経ってからそっと目を開くと、炎上し一部が崩壊した倉の中から、なにかが浮かび上がってくるところだった。

――あれは……本？

だった。月葉のしている幻覚や夢でなければ、確かに本が宙に浮いていた。しかも帯電しているのか、青白い火花をバチバチと散らしている。

「やはりあの魔導書、暴走しているようだ」

真夜が冷静な口調でそう言った。しかし彼の言葉は月葉をさらに混乱させる。

「ひ、ひひ日和さん！ なんなんですか！ アレなんなんですかっ！ 魔導書って一体なんですかっ!？」

「ちょーっと落ち着こうね、月葉ちゃん」

「――ッ!？」

ぎゅむっ、と月葉は日和に抱き寄せられ、彼女の豊満な胸に顔を埋められる。温かくて柔らかい。そんな優しい感触が、息苦しくて「うーうー」と呻く月葉の狼狽を別の意味にシフトさせる。

「大丈夫？ 話聞ける？」

「は、はい……窒息するかと思いましたけど」

まだ動悸が収まらない。月葉の顔は耳まで真っ赤になっているが、日和の突飛な行動のおかげで周りの様子が目に入る程度には心を鎮めることができた。

桐吾と依姫は先程の落雷に驚いて腰を抜かしている様子。二人とも口をぱくぱくさせて陸に打ち上げられた魚みたいだ。ただ依姫だけは目が煌めいているように見えるが、きっと気のせいだろう。

「あそこに浮いてるのが、今回私たちが買い取りにきた魔導書。これはオーケー？」

「はい、オーケーです」

あんな怪奇現象的な本を魔導書と言わずしてなんと言うか。頭では夢だと否定しようとしている自分がいるが、見てしまったものを受け入れる自分の方が圧倒的に強かった。

「うんうん、月葉ちゃんはどこぞの坊主と違って素直でいい子だねえ」

よしよしと頭を撫でられる。落ち着かせようとしてくれているのはわかるけれど、そんな子供扱いに月葉は少し唇を尖らせるのだった。

「姉さん、ついて来たのなら遊んでないで働いてくれ」

「働いてるわよー。今結界を張るとこ」

苛立たしげな真夜の声に日和は答えると、腰に提げている小学生の時から使っているような可愛らしいけど古びれたポーチに手を突っ込んだ。そしてそこからじゃらりと驚愕んだものは――大量の色鮮やかなプラスチックビーズ。

「それじゃあ、月葉ちゃん、お待ちかねの魔術を披露してあげるわ」
日和は月葉に向かってウィंकすると、ビーズを頭上に放り投げた。するとビーズは不自然な軌道で空中を走り、月葉たちを囲むように地面に散らばる。

――え？

月葉は呆然とする。ぼわっ、と七色の淡い輝きがビーズから発生したかと思えば、その輝き同士が結合して大きな五芒星を描いたのだ。月葉たちは五芒星の中に立っている形で、真夜だけが外にいる。手品ではない。実際にこの目で見たからわかる。今の流れは『手品』なんて言葉じゃ片づけられないほど自然を超越していた。

「魔術……本当に……魔術師？」

「そうよ。これは身を守るための結界だから、陣の外に出ると危ないわよ。——あつ、ビーズは動かさないでね。配置、色の順番、全体の図、そういうこと一つ一つに意味があるから少しでもずれると機能しなくなっちゃうのよ」

日和が注意したのは月葉ではなく、輝きに触れようとしていた依姫だった。彼女はコクコクと頷くと、これから映画でも観賞するかのような顔をして祖父の横に正座した。

「日和さん！ 是洞くんが！」

浮遊し帯電しているという、どう考えても危なそうな本——魔導書とやらに近づいている真夜を見て月葉は焦った。彼もこの結界に入れなくてもいいのだろうか。

「ああ、真夜なら心配しなくても大丈夫よ」

弟が危険に飛び込もうとしているのに、日和はそれをさも当然といった様子で見ている。だが、そこに感じられるものは無関心ではなく、強い信頼だった。

「是洞くんも魔術師なんですか？」

「正解だけどハズレ。私はただの魔術師だけど、真夜はそうじゃないのよ」

「どういことですか？」

「魔導書使って言ってね。魔術師よりは魔法使いに近い感じかな。魔導書のこととは魔導書使いに任せるのが一番なのよねえ。まあ、見てればわかるわ」

今はそれ以上説明する気がないらしく、日和は視線を真夜に戻した。だから月葉も黙って彼を見守ることにした。

バチバチ！ バリリイ！

青白くスパークする魔導書を真夜はただ見上げている。一体どうするのだろうか？と月葉が不安げに思っていると――すつ。真夜は右手を真横に翳した。

「第三段第四列――」

唱えるように呟くと、真夜はその右手でなにもない空間から一冊の本を引き抜いた。

「――？火弾？」

パラパラパラ。本が風に煽られるように物凄い勢いで捲れていく。すると本の手前に魔法陣みたいな赤く幾何学的な紋様が展開し、轟！と中心部からバレーボールほどの大きさをした火炎が射出された。

「！？」

驚愕する月葉の視界を、灼熱の火炎球が電気纏う魔導書へとまっすぐに飛んでいく。

そして、直撃。

大地を振動させるほどの凄まじい爆発音が響き、電気纏う魔導書は激しく炎上した。

「も、燃やしちゃった……」

「燃えないわよ」

日和が横から即答する。

「いいかな、月葉ちゃん。魔術界で一般的に魔書と呼ばれる本は二種類存在するの。魔術書と、魔導書ね。魔術書は学校の教科書みたいなもので、言ってしまうえただの指南書。だけど魔導書ってのは、真夜が今やったようにそれだけで特定の魔術を発動させる魔法のアイテム的な代物なのよ。しかも特殊な力が働いていてね、どんなことをしても傷一つつかない」

すぐには理解できない説明を受けたが、最後に言われたことには覚えがある。月葉が持っていた『開かずの本』は、どれだけ乱暴に扱おうとも折れ曲がりすらしなかった。

「でも魔導書の厄介なところはそこじゃなくって、きちんとした処置をしないと勝手に魔力が蓄積されて暴走するところなのよ。アレみたいに。――ほら、真夜が刺激したから反撃がくるわよ」

言われて月葉は空中で炎上する魔導書に視線を戻した。とその時、燃え上がっていた炎が破裂するように内側から弾け飛んだ。

現れた魔導書は、焦げ跡一つついていない。その魔導書から青白い雷撃が迸ったかと思えば、雷撃は真夜ではなく、彼の手前の地面に炸裂した。地雷を起爆させたように芝生ごと大地を爆散させる。

土煙が巻き上がる中、そこから全身青白く発光する狼に似た姿の四足獣が出現した。

「あ、あれって依姫ちゃんが言ってた……」

体中からバチバチと家電がショートしたような音が聞こえる。あれは生き物が雷を纏っているのではなく、雷が獣の形を取っているように思えた。

「フン、？雷獣？の魔導書か。ライセンスランクは二級といったところだな」

一人で納得する真夜に、雷獣が咆哮代わりに雷鳴を轟かせ、飛びかかる。

「第四十三段第十列――」

慌てる様子もなく真夜はまた唱えると、火球を出した魔導書を空間に消し、別の魔導書を引き抜いた。

「――？粹護？」

真夜は二冊目の魔導書を開き、襲い来る雷獣へと突きつける。

瞬間、雷獣は見えない壁にでもぶつかったかのように弾かれた。目を凝らすと、真夜の周囲を力場的な光の層が半球状に覆っているのが見える。

――防御魔法？

月葉は漫画や映画などの感覚でそう思ったが、たぶん間違っていないだろう。

地面を転がって芝生を発火させた雷獣がゆっくりと四足で立ち上がる。そして威嚇するように真夜を睨み、唸り声に似た雷鳴を発する。

それから雷獣は姿勢を低くすると――バリッ。

青白い残光を引き、雷速で真夜へと突貫した。

？粹護？とかいう光の層と雷獣が激突する。凄まじい放電現象が発生し、のたうつ雷が大地を深く抉る。

チッ、と真夜の舌打ち。放電が収まった時、光の層も雷獣も消えてなくなっていた。雷獣は捨て身の一撃で真夜の防御を破ったのだ。バチイイ！！

再び空中に浮遊する魔導書――？雷獣？の魔導書からスパーク音と雷光が閃く。直後、？雷獣？の魔導書から巨大な光柱が天を衝く勢いで立ち昇り、上空で千々に飛び散って隕石のように落下してくる。

「きゃっ!?!」

無作為に降り注ぐ雷撃雨の一つが月葉たちの頭上に落ちる。何百万ボルトあるかわからない雷を受けたら普通の人間である月葉なんて簡単に死んでしまう。逃げ出す暇なんてない。咄嗟に頭を庇う月葉だったが……なんともなかった。

「ほらね、結界の中にいれば安全よ」

顔を上げると、そこには日和の安心させるような笑顔があった。

雷撃雨は彼女の結界に阻まれて内部まで入り込むことはなかったのだ。ひとまずほっとする月葉。

だが、あれは？雷獣？の魔導書。雷撃雨だけでは終わらない。

全ての雷撃雨の落下地点に、最初のものと同じ狼に似た雷獣が現れていた。

何匹いるのか数えられないほどの雷獣たちが月葉たちを包囲し、徐々にその輪を縮めてくる。今度こそ月葉はへたり込みそうになった。

「あーらら、これは厄介ねえ。真夜、襲われる前にアレで一氣に片づけなさい」

「フン、言われなくてもそうするつもりだ」

言葉とは裏腹に全然厄介そうじゃない日和に、真夜はくだらなそうに鼻息を鳴らす。そうして二冊目――？ 粹護？ の魔導書を虚空に消し去り、

「第百六段第十二列――」

また新しい魔導書を取り出し、開く。

「――？ 千刃？」

刹那、上空に巨大な魔法陣が展開され、そこから無数の西洋剣が飛び出した。

両刃や片刃、小剣から大剣まで多種多様な形をした西洋剣が大氣を引き裂くように四方八方へと飛び、周囲を取り囲んでいた雷獣たちだけを正確に仕留めていく。

当然逃げ惑い剣をかわす雷獣もいる。が、雷獣の数よりも飛んでくる剣の方が遥かに多い。かわしたところで別の剣が刺さるだけである。剣に貫かれた雷獣たちは、雷音の悲鳴を轟かせて次々と消滅していく。

「す、凄い……」

まさに剣の嵐と言える光景に呆然としつつ、月葉は感嘆の声を漏らした。魔術を否定する心などつくの昔に塗り替えられている。この二人は、是洞姉弟は、確かに魔術師という非現実的な存在だ。それはもう、認めるしかない。

雷獣たちを一掃するのに十秒とかからなかった。

「……」

真夜は辺りを見回して雷獣が残っていないことを確認すると、三冊目の魔導書もどことも知れぬ空間に仕舞った。それを合図に、辺

り一面に突き刺さっていた西洋剣が空気に溶けるようにすうと消え去る。

ふっ、と浮かんでいる？雷獣？の魔導書の纏っていた電気が消失した。——かと思うと、？雷獣？の魔導書は力尽きたように半壊した倉の瓦礫の上に落下する。

空を覆っていた暗雲も流れ、夕日に焼けた色が覗く。

——終わったの？

「日和さん、あれ、どうなったんですか？」

真夜が？雷獣？の魔導書を拾い上げて何事もなく汚れを叩いているのを横目に、月葉は日和に状況説明を求めた。

「さっきなのであの魔導書が溜め込んでた魔力が尽きたのよ、月葉ちゃん。暴走した魔導書を鎮めるには、ああやって魔導書が魔力を使い切るまで相手してあげればいいのよん」

砕けた調子で言い終わると、日和はパチンと景気よく指を鳴らした。すると、結界を構成していた五芒星の魔法陣が光を失い、魔法陣を描いていたビーズが磁石で砂鉄を吸い寄せるように日和の掌に戻った。日和はそれらをジャラジャラとポーチに放る。

そんな非科学的な光景を前に、月葉は感動しつつふと思う。

「あの、日和さんもあんな凄いきことができるんですか？」

「ん？ それは私も真夜みたく魔導書を使えるかってこと？」

コクンと頷くと、日和はどこにツボがあったのか快活に笑った。

「あはははは、ムリムリ。さっきも言っただけ、私はただの魔術師だから」

「……？」

「あっ、そうか、それも教えないとわかんないわよね。魔術師と魔導書使いの決定的な違いは、魔導書を使う使わない以前に魔力を持っているか持っていないかなのよ」

「魔力を……？」

魔術師を認めてしまったので月葉はなんの疑問もなく受け入れていたが、『魔力』というのはつまり、魔術師が魔術を使用するため

に消費する力のことだろう。ゲームで言うMPみたいに。

「そう。魔導書は使用者の魔力を喰らって発動するから、魔力の素養がない人間には扱えないのよ。だから私みたいな魔力を持たないただの魔術師は、自然からエネルギーを集めて魔力に変換し、魔術を発動させてるってわけ。逆に魔導書使いは自分の魔力が邪魔して自然からエネルギーを集められないから、普通の魔術は使えなかったりするの。あー、どっちが強いかなんて子供っぽいことは訊かないですよ？ どっちも一長一短だからね」

綺麗な顔を困った風に歪ませる日和だが、月葉はそんなことを訊くつもりなどなかった。

「姉さん」

と？雷獣？の魔導書を脇に抱えた真夜が戻ってくる。

「後は任せる。商談は姉さんの方が得意だろう？」

言いながら真夜は魔導書を日和に押しつけた。日和は「了解よん」となにやら楽しげに承諾すると、向こうで「わ、儂の書庫が……コレクションが……」と哀れに思えるくらい放心している紀佐桐吾と、彼を宥めている依姫の下へ歩み寄っていく。あの状態で商談なんてできるのだろうか、と心配になる月葉だった。

その後、日和は意味のわからない言葉を並べ立てて紀佐桐吾から魔導書を買収していた。『暴走魔導書の処理代』がどうのこうのと聞こえたので、恐らく買い取り値を極限まで下げていたのだろう。放心状態の桐吾はただうんうん頷いているだけだったので、なんかやりたい放題のように見えた。

「わたくし、是洞さんのことあまりよろしく思っていなかったのですが、今日で印象が変わりました。こんな身近に魔術師の方がいらっしゃるなんて感激です！ あの、魔導書というものについて詳しくお訊きしてもよろしいですか？ 普段からお読みになっている本も魔導書なのですか？ それと是洞さんはどこから本の出し入れを？ それから――」

「……お前、少し黙ってくれ」
スイッチの入った依姫は目の色を変えて真夜に一方的な質問攻めをしていたが――

「是洞さん！ 是非わたくしにも魔術の使い方を教えていただけませんかっ！」

果てにそんなことを言い出したので、月葉たちは彼女から逃げるように紀佐邸を退散したのだった。

「依姫ちゃん、なんか凄かった……」

普段は清楚で落ち着いている彼女にも、あそこまで興奮する趣味があるのだと知って少々気疲れた月葉である。

「フン、政府の上層部や上流階級の人間には魔術を認識している者も少なくない。あいつみたいな趣味を持っている奴がいたところで別に不思議はないだろ」

「……いちいち鼻を鳴らしてると感じ悪いよ、是洞くん」

「知るか。僕の勝手だ」

「仲がいいわねえ、お二人さん。もしかして学校でもイチヤイチャ

してるのかな？」

「冗談じゃない」

「そ、そそそうですよ日和さん！ 今日初めて話したくらいですよ！」

「ところで真夜、車酔いは治ったのかしらん？」

「思い出させるな……うっ」

車内でそんな会話をしつつ是洞古書店に帰り着くと、外はすっかり夜の帳が下りていた。

月葉の想像していた通り、夜の是洞古書店はおどろおどろしい雰囲気がある。オバケはいなくても妖怪くらい住んでいそうだ。

店内に入るとタイミングよく日和の携帯が鳴った。電話に出た日和は青い顔をしながら「ちょっと待っててねん」と言い残して外へ引き返していく。

何事かと思っていたら、

『もうちょこつと締切伸ばしてくれたらヒヨりん嬉しいなあ、テヘ♪ ……え？ ダメ？』

と外から聞こえてきたので、電話の相手は彼女が書いている小説の担当者だとわかった。

「始めるぞ」

店の照明をつけた真夜が唐突にそうやってきた。まだ若干辛そうだ。

「始めるって、なにを？」

きよとりと首を傾げると、真夜は大層面倒臭そうに長い溜息を吐いた。

「……お前、もしかしてアホか？」

「し、失礼ね！？ 私はこれでも成績いい方なんだから（中の上だけど）」

「知識があってもアホな奴はアホだ」真夜はバツサリと切り捨て、

「お前、今ここにいる目的を忘れてるんじゃないか？」

「あっ……」

真夜の言う通り、月葉は頭からそのことがすっぱり抜けていた。あんな非現実を目の当たりにした後なのだから忘れたって仕方ないだろう。そう反論してやろうかと思ったが、言い訳しているみたいで癪だったので月葉は黙ってカバンから件の本を取り出した。

それを認めると、真夜はどこか満足げに踵を返す。

「ついてこい」

命令口調でそう言って、真夜は会計台の横にあるドアを開けた。

ドアの奥には階段があった。

二階に登る階段と、地下に向かう階段だ。

真夜は迷うことなく地下へ。月葉は少し躊躇ったが、真夜が待つことも振り向くこともなく進んでいくので勇気を出して後に続いた。階段は明かりをつけても薄暗く、底が見えないほど長い。この屋敷の住人が魔術師であることから、これより先は普通の世界ではない気がする。ホラーゲームを体感プレイしている気分だった。いきなり天上から腐りかけの動く死人とかが落ちてきたら……と想像しただけで足がガクガクと小刻みに震え始める臆病者・月葉である。

「ビクビクするな。別に人肉を喰らう怪物なんていない。余計なことでせう僕の後ろを歩け」

壁に両手をついて亀のようにノロマになる月葉を、真夜は立ち止まって苛立たしげに見やる。だが、彼の口調は幾分か優しく感じた。おかげで気持ち少し楽になった。

——もしかして是洞くん、私のこと気遣ってくれた？ ……まさかね。

気のせいだと思い直していたら——カチッ。

月葉が手をついた壁からなにかのスイッチを押したような音。

「このアホがっ！」

「ひえ!？」

ぐいっと腕を真夜に引っ張られた月葉は、バランスを崩して彼に抱き留められる。そのことに羞恥心を覚える前に、紫色の光が轟音と共に薄暗い階段を照らした。

振り返ると、さっき月葉が手をつけていた壁に魔法陣が描かれ、そこから何本もの紫色の電流が対面の壁へと流れていた。

紫電の防壁。真夜が咄嗟に腕を引っ張ってくれなかったら、月葉は今ごろ黒焦げになっていただろう。

「あ、ありがとう」

月葉はお礼を言いつつ、密着状態の恥ずかしさが遅れてやってきたため慌てて真夜から離れた。顔が自分でもわかるほどに紅潮している。

「だから余計なことをするなと言ったんだ。この店には姉さんが防犯対策に様々な魔術的トラップを仕掛けている。死ぬほどの仕掛けはないだろうがな」

「そ、そういうことは最初に言っただけよ！」

是洞古書店はオバケ屋敷じゃなくて忍者屋敷だった。

「とにかく、痛い思いをしたくなければしっかりと僕の後をついてくるんだ」

真夜の態度にムツとするも、ここで逆らうわけにもいかない。観察していてわかったが、真夜は時々ジグザグに動いたり一段飛ばしたりしている。それも月葉にもわかる大げさな動作でだ。そこにトラップがあることは理解できるが、そんな見てないと気づかない親切よりも口でちゃんと説明してほしいと思う月葉だった。

階段を下り切ると、そこには頑丈そうな鉄の扉があった。奥が地下牢だとしてもなんの不思議もない厳つい扉だが、入ってみるとそこも数多の本が収容されている書庫だった。

窓と会計台がないことを除けば、一階の店と大差ない空間が広がっている。ただよく見ると、ぎっしりと棚に詰められている本が魔導書や魔術書といった類の物だと今の月葉ならわかる。

本棚の間を縫って奥へ行くと、部屋を中心に小さなスペースが設けられていた。そこには神殿の柱を切り取ったような大理石の台座がポツンと佇んでいる。

「お前の魔導書をその台に置け」

「これからなにをするの？」

月葉は疑問を口にしながら言われた通り『開かずの本』を台に乗せる。

「その魔導書が開かないのは封印がかかっているからだ。そいつをこれから？解析？する」

端的に言うと言夜は右手を真横に伸ばし、

「――第八十三段第二列」

唱えるのとほぼ同時に、虚空から一冊の魔導書を抜き取った。何冊か見て思ったことだが、魔導書の色・大きさ・厚さはどれも似たり寄ったりで月葉には見分けがつかない。

「ねえ是洞くん、その魔導書を取り出したりするのもやっぱり魔術なの？」

「お前も紀佐みたいなことを訊くんだな」

「いいでしょ、気になったんだから」

言夜は取り出した魔導書を開く前に、フン、と面倒臭そうに鼻息を鳴らした。それはもう彼の癖なのだろう。とつても捻くれた癖であるが……。

「魔導書使いは？書棚？という自分だけの魔術的空間を持っている。？書棚？に収納できる魔導書の数に術者の魔力量に比例し、僕が今やったように取り出す時は収納している場所を唱えなければならぬいい」

「……なんかパソコンみたい」

月葉は先日行った選択科目の情報の授業を思い出していた。コンピュータのメモリには容量があって、そこへ格納されるデータにはアドレスがつくとかなんとか。

「わかったなら黙って見ている。この？解析？の魔導書を使うにはそれなりに集中しなければならないんだ」

言夜は『開かずの本』と向き合い、今し方手に取った魔導書のページを繰る。

すると、大理石の台座を中心に薄青色の魔法陣が床に広がった。

？雷獣？の魔導書を鎮圧する時に見た魔法陣とは違い、こちらは美術5の月葉でも模写することすらできそうにないほど複雑な紋様をしている。

魔法陣に連動し、真夜の持っている魔導書も薄青に輝く。一定間隔でページを捲っていく彼の横顔は真剣で、月葉は集中を乱しては悪いと思って口を噤んだ。

「ハロハロー、やってるわねえ。どんな感じ？」

と、重たそうな鉄扉を普通のドアと変わらない感覚で開けた日和が軽いノリで話しかけてきた。

「あ、日和さん、小説の方はいいんですか？」

「うっ……訊かないで、月葉ちゃん。大人には大人の事情ってものがあるのよ」

どうやら締切は伸ばしてもらえなかったようだ。

日和は真剣に作業に没頭している弟に視線を投げ、

「ふうん、あの真夜が？解析？の魔導書まで持ち出したんだ。相当厄介みたいね」

「あの、日和さん、是洞くんはなにをしてるんですか？」

「あはは、やっぱり真夜、ちゃんと説明してなかったのね」

苦笑する日和はそのメロンみたいな双丘を持ち上げるようにして腕を組む。

「あれは？解析？の魔導書って言ってね、あらゆる魔術を分析してその構造や効果などを自動でページに書き記していく魔導書なの。使うために一級ライセンスが必要な上級魔導書の中でもトップクラスの複雑さだから、流石の真夜でもあんなに集中しないといけないんだよねえ」

「その、前にも言っていましたけど、ライセンスってなんですか？」

「んとね、世界最高最大の魔術師協会『白き明星』が発行する魔書を所持・閲覧・使用するための許可証のことよ。他にも魔書の売買とかにも関わってくるわね」

魔書というのは確か、魔導書と魔術書のことだ。

「魔術にしても魔導書にしても、術者の力が及ばないものを使用すると肉体や精神が壊れたり酷い時には死んだりすることだってあるの。それを防ぐために設定されたのが魔書閲覧ライセンスってわけ。初級から特級まで六段階で分けられてるわ」

「なんとか検定みたいな感じですか？」

「そうそう、そんな資格試験みたいな感じよん」

物わかりのいい月葉に日和はニコニコの笑顔を向けてくる。月葉は一人っ子なので、もしも姉がいるとすれば日和みたいな人がいいなと思った。

「……ふう」

息をついた真夜が？解析？の魔導書を閉じた。それと同時に床の魔法陣も消失する。

「終わったみたいね、真夜。どうだった？」

「フン、どうもなにも、まだ全体の五分の一も解析できていない」

「はい？ 終わらなかったわけ？」

「流星は来栖杠葉のかけた封印だ。？解析？の魔導書を用いてもそう簡単に調べがつくものじゃなかった」

残念そうに目を伏せる真夜。その様子に若干疲れの色を含んでいるような気がした。

大理石の台座に置かれていた『開かずの本』を手に取り、真夜はその黒真珠のような瞳で月葉を見た。

「そういうわけだ。悪いが、お前の魔導書はしばらく僕が預かる」

「え？ ちよっと、どういうこと？」

「今日はもう閉店ってことだ。これ以上解析が続けると僕の体が持たない」

「だったら本は返してよ。また来るから」

月葉は手を差し出して本を受け取ろうとするが、真夜は頑として返そうとしない。

「ふざけるな。無ライセンスどころか魔術師でもないお前に魔導書を渡せるか。封印の解析が完了して解除できれば内容くらいは教え

てやる。だが、その後でこの魔導書は買い取らせてもらおうぞ」

「ちょ、ちょっと勝手過ぎないかな！　その本は私にとってお母さんの形見なんだよ！」

「だったらお前も魔術師になってライセンスを取得すればいい。来栖杠葉の娘なら不可能じゃないはずだ。そうなれば買い取った時の値で売ってやる」

「そんなの……無理だよ……」

真夜の言い分はきつと正しい。月葉があゝの魔導書を持っていることは、無免許運転をしていることと同義なのだから。

でも、月葉はどこにでもいる平凡な女子高生だ。魔術師なんて非現実な存在になるなんてそれはもう漫画かアニメの世界である。無理に決まっている。このままでは、母の形見は永遠に返ってこない。そう思うと急激に熱いものが込み上げ、月葉の目尻から水滴が零れた。

——あれ？　私、どうして涙が……？

こんなに悲しい気持ちになるほどに、月葉は母親との繋がりを求めているのだろうか。

泣き顔を見せないために俯いた月葉の肩を、日和がそっと抱いた。

「女の子を泣かせるなんて最低よ、真夜」

「僕はなにも間違ったことは言っていない。所持できる資格を得るまで売らずに取っておいてやるんだ。それでも良心的だろう」

全く悪びれる様子のない真夜に日和は溜息を一つ。彼女も真夜の方が正しいとわかっているのだ。

「ごめんね、月葉ちゃん。でもこの真夜は特級ライセンスを持つ魔導書使いよ。信頼はできるわ。だから月葉ちゃんの知りたいことはすぐに教えてくれるはずよ。そう、アレよ。貸し金庫に預けてると思ってさ、元気出して、ね？」

「……はい、くすん。わかりました」

日和の慰めを受けて月葉はとりあえず了解したが、まだ諦め切れではないなかった。

と、そこに――

「初級くらいなら、姉さんが教えればすぐ取れる」

真夜が？解析？の魔導書を？書棚？に仕舞いながら、ぼそりと呟いた。すると日和が「それよ！」と頭上で豆電球を光らせたみたいニアと閃いた顔になる。

「ねえ、月葉ちゃん、私の弟子にならない？」

「え？ 弟子……ですか？」

月葉は指で両目の涙を拭う。

「そうよん。丁度お店のアルバイトも欲しいなって思ってたところだし、バイトしながらお姉さんが手取り足取り教えちゃうぞ」

アルバイト。学校の校則では特に禁止されていないけれど、月葉は家の家事全般を任せられているためそんなこと考えたこともなかった。

しかもこれはただのアルバイトではない。魔術師になるためにここへ通う名目上のアルバイトだ。承諾しまうと、月葉も非現実の道突き進むことになるだろう。

――でも。

聞くところによると、月葉の母親――来栖杠葉は魔術師の世界では有名人だったらしい。魔術師の道は、おぼろげな記憶の中にいる母親が通ったものと同じ道だということだ。

月葉が母親のことをあまり知らないのは、きっと住んでいる『世界』が違ったから。

――魔術師になったら、もっとお母さんのことわかるかもしれない。

だとすれば、迷うことはない。

小さい頃に憧れた魔法少女になれると思えばいい。右も左もわからない世界ではなく、是洞姉弟という道標もあるのだ。

覚悟が、決まる。

「……やります。私、アルバイトやります！」

ポジティブな想いと一抹の希望が、月葉の口を動かしていた。

是洞真夜は店の地下書庫に籠っていた。

店の二階に自室もあるのだが、真夜は自宅にいる間のほとんどの時間を地下書庫で過ごしている。理由は単純、このの方が落ち着くのだ。

あれから三日が経ったが、例の魔導書の封印は未だに解析できていない。魔術界屈指の魔書作家――来栖杠葉が仕掛けたと思われる封印は、魔術に対するプロテクトが尋常ではないのだ。

それでも、徐々にはあるが解析は進んでいる。現在わかっていることは、この封印は魔導書の暴走を防ぐ役割もあることと、日に封印の力が僅かずつ弱まっていることだ。

後者がわかったところで本日の解析作業を終え、真夜は休憩がてら書庫内の隅にあるテーブルで別の魔導書を解読していた。実はこの地下書庫にある魔書は全て売り物で、真夜が今腰かけている椅子とテーブルは客との商談に使うための物だったりする。

時計を見ると午後七時を回ったところだった。地下にいると時間の経過がどうも曖昧に感じる。

しばらく休憩していると、ペシペシ。後頭部を薄くて柔らかいなにかで叩かれた。

「……」

真夜は無視を決め込むが――ベシベシ。更に力を込められる。

――鬱陶しい。

「……なんの用だ？」

振り向かず苛立ちを孕んだ声で問うと、そいつは対面へと回り込んできた。セミロングに伸ばした髪に、ツユクサを模した縹色の髪留めをしている少女だった。濃い緑色を基調としたエプロンを高校の制服の上からかけ、首からはマジックで『是洞古書店 来栖』と書かれた即席のネームプレートが提げられている。

「せっかくコーヒー淹れたから持ってきてあげたのに、態度悪いよ、真夜くん」

彼女——来栖月葉は、くりっとした目を猫のように釣り上げ、むうとした表情で真夜を睨んだ。言葉通り左手にはティーカップとミルクと角砂糖の瓶を乗せた盆を持ち、右手には真夜を叩いたと思われる布はたきを握っている。

「掃除道具と飲料物を一緒に持つてくるな。埃が入る」

「入ればいいんじゃないかな？ 砂糖五個分くらい」

笑顔で本音を晒しながら月葉は盆をテーブルに置いた。真夜は先日、彼女の親の形見を取り上げるような真似をしたため、それを根に持たれているのだ。

「というか聞いてよ。日和さんってば全然魔術のこと教えてくれななんだよ。小説の方が忙しいのはわかってるんだけど、これじゃあ約束が違うと思わない？」

月葉は二日前からこの是洞古書店でアルバイトをしている。しかしそれは建前上であり、本来の目的は是洞日和——真夜の姉から魔術師となるためのイロハを教わることである。やかましくて迷惑千万だ、と真夜は思うが、自分が原案を出したようなものだから今さら文句は言えない。

「……」

真夜は月葉の愚痴に対してなにも言わず、コーヒーにミルクをたっぷり注ぐと、角砂糖の瓶を傾けてポトポトと適当な数を放り込んだ。

「うわっ、真夜くん、それ砂糖入れ過ぎじゃない？ 糖尿病になっても知らないよ？」

「魔書の解説には頭を使う。糖分は必要だ」

「それにしても多いと思うけど……十個以上あった瓶に三個しか残ってないし、飽和してるし」

月葉は味でも想像したのかしかめっ面をしている。そんな彼女になど構わず、真夜は甘ったるいコーヒーを平然と口にするのだった。

「ところでお前、僕に愚痴を零しに來ただけか？」

「お前じゃなくて『月葉』。ちゃんと名前で呼ばないと日和さんが怖いよ？」

愉快そうな笑みを浮かべる月葉に指摘され、真夜は苦々しく舌打ちした。

事の発端は二日前、月葉のアルバイト初日に日和が『是洞は二人いるから月葉ちゃんもこの坊主を「真夜」と呼びなさい』と言いつ出したことだ。そのとぼちりで真夜も彼女のことを名前で呼ぶように命令されてしまった。

——いい迷惑だ。

当然、そう思った真夜はコンマ二秒で却下したが——

『ほほう、お姉さんに逆らうと毎日手料理を食べさせるわよん？』
などと脅迫されては真夜も首を縦に振るしかない。日和の料理は上手下手という言葉とは次元が違う。料理を魔術的に作成するためいろんな意味で危ないのだ。その証拠に、昨日好奇心で日和の手作りクッキーを食べた月葉が三十分ほど麻薬中毒者のようにトリップしていた。

だが一番いただけないのは、名前を呼ばれて嫌がる真夜を月葉が面白がってしまったことだろう。

「ほらほら真夜くん、昨日の私みたいになりたくなかったら私の名前を言ってごらん？」

「子供かおま……月葉は」

別に名前で呼ぶことに抵抗はない。ただ、慣れていないだけなのだ。

「よろしい」と勝ち誇ったように胸を張る月葉。最近彼女が姉に影響されつつあることは真夜にとって悩みの種だった。

「私はちゃんと仕事で來たのです。で、真夜くんは仕事もせずになにを読んでのの？」

さり気なく嫌味を含ませた月葉が覗き込んでくる。真夜は開いていた魔導書を閉じ、

「この前紀佐桐吾から買い取った？雷獣？の魔導書だ。魔術師協会に申請した所有者登録が完了したからこうして解読している」

「あれ？ それも売り物だよ？ 勝手に解読しちゃってもいいの？」

「なにかあった時のために売り手側も魔書を理解しておく必要があるんだ。だから魔書の販売は一級以上のライセンスを取得している魔術師がいないとできないことになっている」

「ふうん」

納得しているのかしていないのか、適当な返事をする月葉。

「わかったなら話しかけるな。邪魔だ」

言うと、月葉はムツと唇を尖らせた。

「この地下室もお店なんだよね？ お掃除するから真夜くんも私の邪魔しないでよ」

「！ やめろ！ 余計なことはするな！」

早速布はたきで棚の埃を落とそうとした月葉を、真夜は語気を強めて制した。突然の大声に月葉の肩がビクリと跳ねる。

「余計って……店内のお掃除はバイトの仕事なんだけど？」

「それは上だけでいい。ここはただの書庫じゃない。魔書の収容庫だ。知識のないやつが勝手に弄ると魔導書の暴走を引き起こすかもしれない」

先日のことを思い出したのか、『魔導書の暴走』と聞いた月葉は顔を蒼白させて布はたきを引っ込めた。

「地下は僕が管理しているから、お前は姉さんの手伝いでもやっていろ」

突き放すような口調で言った真夜に、月葉は拗ねたように頬を膨らませた。

そのまま立ち去ろうとする彼女だったが、なにかを発見した様子で戻ってくる。

「ねえ、真夜くん、その魔導書ってもしかして私の？」

月葉はそう言いながらテーブルに置かれた魔導書を指差した。

「そうだ。言っておくが、まだ教えられることはなにもないぞ」

「まあ、それはわかってるんだけど、ちょっと見せてほしいなあって思ったりして」

そーっと慎重に手を伸ばしてくる月葉から、サッと真夜は魔導書を遠ざけた。

「ムッ」

眉を吊り上げた月葉が対抗して魔導書に掴みかかってくるが――サッ。

「ていつ！」

サッ。

「そこっ！」

サッ。

「ムキーツ！」

「お前はサルか」

いい加減にウザったくなかったので、真夜は魔導書を？書棚？へと収めることにした。

「ああっ！？」

空間に消える魔導書を見て愕然とする月葉。真夜が所有する魔術的空間――？書棚？に仕舞えば彼女にはもうどうすることもできないのだ。

「フン、奪い返そうなんて考えないことだ」

わかりやす過ぎる月葉の行動に真夜は短く溜息を吐いた。

「むう、マヨちゃんのイジワル」

「なっ、僕をその名で呼ぶな！」

ギロっと人を殺せそうな視線で睨んでやると、月葉は「あはは」と笑いながら駆け足で地下から逃げ出すのだった。

「まったく、本気で鬱陶しい奴だ」

真夜がそう漏らした直後――

『ちよっと日和さん！ さっき片づけたのになんでもう散らかって

るんですかっ!」

『いや違うのよ月葉ちゃん! これには魔術的な深い意味があつてね』

『小説書くのに魔術いるんですか! 嘘つかないでくださいっ!』

開けっばなしの鉄扉の向こうから、女子二人の大声が地下まで届いてきた。

「……なんというか、あいつは書店の店員というより——」
呆れ口調の真夜はぽつりと独りごちる。

「——母さん、みたいだな」

翌日。私立凜明高校——一年三組の教室。

「はふう〜」

昼休みに入った途端、月葉は情けない声を出して机に突っ伏した。流石に毎日バイト先へ通っていたら疲労が溜まるのだ。午後の授業で居眠りしない自信がない。

なにも連日で出勤しなくてもよかったと後悔する。日和からは好きな時に手伝ってくればオーケーと言われてるし、バイトをすることが本懐ではないのだから。

けれど……

——あの二人、魔術以外のことになるとうっごくいい加減なんかもん。

黙っていられなくなった月葉は主婦歴七年——切り上げれば十年になる魂に火をつけ、店内の掃除やらなにやらをこの三日間で猛然とやってのけていた。これでは家政婦だ。

真夜はいいとしても、大雑把な性格の日和はすぐに周りを散らかしてしまう。度が過ぎてきたら真夜が動くらしいのだが、今日も行かないと大変なことになっていそうだ。

要するに、月葉は放っておけないのである。

「……」

なんとなく恨みがましい視線でクラスメイトの真夜を探してみるが……いない。どうせいつものように図書館にいるのだろう。

と——

「やつはー、月葉。あまり景気のいい顔してないね。どったの？」

「お疲れのようですね。確かに先程の体育のバレーボールはハードでした」

八重澤理音と紀佐依姫が弁当箱を乗せた机を寄せてきた。

「え？ そんなにハードだったっけ？ 楽しかったじゃん」

「理音さんは大活躍でしたもの」

入学して二ヶ月経った今でも数々の運動部からスカウトが来るほど、理音は運動神経抜群なのだ。四時間目のバレーボールでも、彼女はピョンピョン飛び跳ねてほとんど一人で得点を稼いでいたように思えた。彼女と同じチームだったらまだ楽だったろう。

「あっ！もしかして月葉の顔面にクリティカルショット決めちゃったのが後引いてる感じ？　だったらあたしのせいだ。ごめん！」

拝み倒すように頭の上で両手を合わせてくる理音。いつも思うが、彼女は先走り過ぎだ。顔面ヒットは痛かったけれど。

「えっと、そうじゃなくてね。なんて言えばいいのかな？　家事を二軒分やってる感じというか」

「そんなに忙しいのですか？　是洞さんのお店のアルバイト」

「うん、まあ、私が自分で勝手に忙しくしてるんだだけ、ど？　……あれ？　私、アルバイトのこと話したっけ？」

「わっ！　馬鹿、依姫」

記憶になかったので訊ねてみると、理音と依姫は悪戯がバレた子供のような焦り顔になった。

「というか、月葉は変な噂を立てられないために黙っているつもりだった。なのに――」

「……なんで知ってるの？」

ジト目で問い詰める。すると観念したのか、理音がうなじの上辺りで結った髪を弄りながら口を開いた。

「やはは……ほら、月葉ってさ、ちよっと前から忙しいうって言って付き合い悪くなったでしょ？　だからなんか怪しいなあって思って」

「昨日、こっそり後をつけさせてもらいました。すみません、月葉さん」

笑って誤魔化す理音と、素直にペコリと頭を下げる依姫。二人に尾行されていたことに月葉は全然気づかなかった。彼女たちは探偵になれるかもしれない。

「そっかあ、二人には知られちゃったのか」

クラスメイトの、それも男子の家でアルバイトをしているなんて知られたくなかったが、バレてしまったのなら仕方ない。そもそもこの二人は無関係ではないし、アルバイトのことくらいは知ってくれていた方が今後とも都合がいいだろう（魔術師修行のことは言えないけれど。特に依姫には）。

「言っておくけど、変な意味はないからね。この前の開かない本関連でこうなってるんだからね」

「ほほう、変な意味とはどういう意味かなあ？　おいちゃんわかんないなあ」

「り、理音さん、なんかそれ嫌らしいですよ」

二人が尾行していたことは軽く許し、そのまま三人でそれぞれの弁当箱をつつく。理音は購買で売っていたらしい鶏のから揚げ弁当、月葉は卵焼きやタコさんウィンナーの入った平凡な手作り弁当、依姫は一流シェフが作ったような色鮮やかなクラブサンドをバスケットから取り出していた（これでも金持ち度を手加減しているとかな）。

「ところで月葉、バイト代いくら？」

「えっと、時給五百円くらいかな」

「少なっ！？　最低賃金以下じゃん！？」

「まあ、例の本の鑑定料を引かれてるから」

「だとしても少ないと思います。抗議してみてはどうでしょう？」

そんな感じに和気藹々と談笑したり、弁当の中身を交換したりと、普段通りに昼休みの時間が過ぎ去っていく。

そして――

「（依姫ちゃん、ちょっといいかな？）」

先に食べ終わった理音がトイレに立った隙を見計らい、月葉は声のボリリュームを落として依姫に訊ねた。

「（なんですか、月葉さん）」

月葉の真剣な声になにかを感じ取ったらしい依姫も小声になる。

「（依姫ちゃんって、魔術師のこと知ってたの？）」

それは月葉がずっと気になっていたことだ。学校では理音か他の

誰かが近くにいてこれまで訊きそびれていたし、それ以外の時間はバイトや家事で手一杯だった。しかも月葉は今時の女子高生にしては珍しく携帯電話を持っていない。もうすぐ来る誕生日に父が買ってくれることになっている。

「（はい、そのような方が実在することは存じておりました。ですが、本物を見たのは先日が初めてです）」

上流階級の人間の中には魔術を認識している者も少なくない。そう真夜が教えてくれたけれど、どうやら本当のようだ。でなければあんな非現実を見た依姫がその後も平然としていられるはずがない。「うん、ありがと依姫ちゃん。それが訊きたかっただけだから」

納得した月葉は声を元の大きさに戻した。もっと突っ込んだ話もしたかったが、これ以上は彼女のオカルトマニアモードを起動させてしまう恐れがある。学校では金持ちであること以上に隠しておきたい趣味らしいので、あまり刺激しない方がいいだろう。

「たっだいまあ——って、なあに二人でコソコソ話してんのかな？ 怪しいなあ」

元気よく戻ってきた理音がお得意のニヤ顔で問い詰めてくる。対する月葉と依姫は顔を見合わせ——

「秘密だよ、理音ちゃん」

「秘密です」

「むむむ、この理音様を除け者にするとは言い度胸だねフッフッフ」その後、月葉はプロレス番組を欠かさず見ているという理音に緩くチョークスリーパーを決められるのだった。

場所は移動し、是洞古書店。

静寂で閑散とした店内にただ一人、是洞日和は会計台の椅子に腰かけてひたすらノートパソコンと睨み合っていた。

日和が手掛けている小説の執筆である。内容は現代に隠されて存在する魔術学校を舞台としたファンタジーラブコメディーなのだが、その『本当に魔術がある』と読者に思わせるリアリティのおかげで『大』はつかないまでもそこそこヒットしている。本物の魔術師が本当にある魔術学校をモチーフとして書いているのだから、リアリティがあるのは当然だ（無論、素人が真似しても魔術は発動しないようにしている）。

「あうー、頭痛いわあ」

締切まで残り三日。しかし全体の半分しか完成していないという現状に日和は突っ伏した。雰囲気出るかと思って執筆中には伊達眼鏡をかける日和だが、それで頭が冴えたりすることはない。

「えーと、これがこうでここがこうなってるから、この辺あのキヤラを出して――いやそれだと矛盾が……。ああもう！ どうやったらうまく纏まるのかしらね！」

懸賞金目当てで書いた上、既に完結しているつもりだったので続編なんてこれっぽっちも考えていなかった。編集部に認められるほどの文才はあるが、構想を練ることに關しては非常に苦手な日和である。プロットなど生まれてこの方一度も作ったことがない。

「やっぱ向いてないかなあ、作家」

とは思うものの、皮肉なことに本業の古書店よりも収入がいいからやめるわけにはいかないのだ。

伊達眼鏡を時々クイクイさせてうんうん唸っていると、店の扉が開く音が聞こえた。

「いらっしゃいますえ」

覇気のない挨拶をする日和。店主としてどうかと思うけれど、日和にそこを正す意思はない。ここへ来る客は一般ピーポーではない方が多いからだ。魔術師という生き物は店員の愛想なんてアウトオブ眼中。振り撒くだけ無駄というものである。

「失礼、是洞古書店という店はここで合っているかな？」

会計台の前に立った客が紳士然とした口調で声をかけてきた。対する日和はパソコンの画面から目を離さずに、

「そうだけど、表の看板見なかったのかしら？」

「私はまだ『漢字』というものには慣れていなくてね。難しい字は読めないのだよ」

台詞に不自然さを覚えた日和が客の方に視線を向けると、そこにはアッシュブロンドのロン毛をした長身痩躯の青年が立っていた。グレーの燕尾スーツをキツチリと着こなし、やり手の営業マンを思わせる雰囲気醸し出している。

切れ長の青い目に高い鼻——西洋系の外国人だった。『漢字』に慣れていないわけである。しかし喋っている日本語はとても流暢だ。よく訓練されている。

激しく胡散臭さを感じるが、彼も歴としたお客様だ。

「それで、ご用件は？」

「ある本を探している」

「タイトルを言ってくれないとわからないわよ？」

「ふむ、それもそうだ。だが生憎とタイトルは私も知らなくてね」ネットで調べてから来なさいよ、と日和は心の中で毒づいた。しかし青年はそんな日和の内心など知らず、どこか誇示するように言葉が続ける。

「来栖杠葉氏の魔導書がここにあると聞いて来たのだよ」
「へ？」

日和は青年の言葉をすぐに理解できず間拔けな声を上げた。

来栖杠葉の魔導書。あるとしたら、あの一冊だけだ。けれど、あの本がこの店にあるなんて宣伝をした覚えはない。真夜が人様の物

を言い触らすような真似はしないだろうし、持ち主の月葉に至っては論外だ。

「あなた、魔術師ね。その話はどこから聞いたのよ？」

警戒心を高めて訊ねると、青年は口元を不敵な笑みで歪めた。

「ある情報屋から情報を買ったのだよ。おっと、その情報屋のことは訊かないでくれたまえ。私もよくは知らないのね」

釘を刺されたが、情報屋なる者については後で調べた方がよさそうだ。

「じゃあ、あなたのことを聞かせてくれるかしら？」

「これはすっかりしていた。私としたことが、レディーを前に名乗りもしなかったとはね」

青年は、うおほん、と咳払いをし――

「私はアドリアン・グレフ。二級閲覧ライセンスを持つ元貴族の魔導書使いだよ」

そう名乗って魔術師協会発行の証明書を掲示した。元貴族だからんだか知らないが、たかが二級のくせに随分と尊大な物言いだ。日和は青年に対する好感度を水平線からやや斜め下へと傾けた。

「では、レディーの名前をお聞かせ願ってもよろしいかな？」

「是洞日和、一級閲覧ライセンスを持つ魔術師よ」

あてつけるように『一級』の部分を強調する日和だったが、アドリアンは微塵も動じなかった。魔書の販売を行っている時点で一級以上のライセンスを取得していることは周知だからだろう。

「是洞日和氏、なんて可憐なお名前だ」

「お世辞はいいわ。気持悪いから」

紀佐桐吾のようにそういう言葉は心から言ってもらいたいものである。

「失礼。それで本題だが、来栖杠葉氏の魔導書を買ってもらいたい」

「残念ね。あなたの探し物はここにはないわ」

「なに？ それは困った」

芝居がかった仕草でアドリアンは額に手をやった。本当に困って

いるのかわからない。

彼はしばらく日和には聞こえない音量でぶつぶつと呟いた後、こう持ちかけてきた。

「ふむ、では代わりに別の魔書を買おう。案内してくれたまえ」

お引き取り願ってもよかったが、彼がまだ買い物をすると言うので日和は商売人の顔になった。

「あはっ♪ そう来なくっちゃね。こっちよ」

ただし、ぼったくりを企む悪徳商売人の顔だったが……。

日和はアドリアンを地下書庫に案内した。当たり前だが、誰かが店番をしている時は防犯術式をオフにしているためスムーズに地下まで潜れる。

アドリアンは地下書庫内を見回し、日和に問う。

「これだけかね？」

「少なくて悪かったわねえ。もっとも、一級以上の魔書はさらに下よ。あなたは二級でしょう？ だからそこへは案内できないわ」

是洞古書店の構造は二階が自宅、一階が一般書店、地下一階が二級以下、地下二階が一級以上の魔書収容庫となっている。二級以下と一級以上では重要性が変わってくるのだ。

「それは構わない」

アドリアンは適当な棚から適当な魔書を取り、日和に見せる。

「これをいただこうか」

「いいけど、それ魔術書よ？ あなた魔導書使いじゃなかったっけ？」

「いいのだよ。私は魔術書も集めているのでね」

不遜な態度で言いながら、アドリアンは懷に手を入れた。彼がそこから取り出した物は万札の束、それも二個。

「これで足りるかな？」

アドリアンは気障ったらしく白い歯を見せてはにかみ、二個の札束——恐らく二百万円——を日和の手に優しく握らせた。

「え？ こんなに？ 足りるものにも、これそこまで大した魔術書

じゃないわよん？」

大金を前に目を輝かせる日和。初めからぼったくるつもりだったが、予想以上の展開に思わず語尾を碎いてしまうほどテンションが跳ね上がる。簡単に確認するも、ニセ札ではなさそうだ。これほどの大金を前にしたのは小説が受賞した時以来である。

「構わない。ただし、そこには情報料も含まれていてね。少々お聞きしたいことがあるのだが？」

「いいわよん。私の答えられる範囲ならなんでも教えてあげるわ」
思わぬ儲けに日和はすっかり浮かれてしまっていた。だから――
「来栖杠葉氏の魔導書なのだが、君は『ここにはない』と言っていた。それはどこにあるのか知っている者の言葉だ。どうか教えてもらえないかね」

つい、口を滑らせてしまった。

来栖杠葉の娘のことを――。

「つーきはっ！ 今日こそは逃がさないからね。一緒に帰ろっか」
放課後、教科書等をカバンに片づけていた月葉の後ろから、理音が抱きついてきた。

「レッツ寄り道だぁ！ 商店街に新しくケーキバイキングのお店ができたっばいからそこ行こそこ」

「うん、いいよ。でもその後で私はバイト行くから」

「むう、毎日バイトやってると身が持たないよ？ 風邪とか引いたらこの家庭科1の理音様があんなことからこんなことまで看病しちゃうぞムフフフ」

「え、遠慮しとくよ。ていうか手つきが嫌らしいよ理音ちゃん」

理音の抱擁から解放された月葉はカバンを持って席を立った。そこでいつも一緒にいる友人が一人足りないことに気づく。

「依姫ちゃん？」

「んー、なんか用があるから先に行ってオッケーだってさ」

先生と進路相談でもしているのだろうか、と特に疑問を持たずに月葉は理音と二人並んで下校する。

「月葉ってさ、ママのことどれだけ覚えてる？」

廊下を昇降口に向かって歩いていると、理音がなんの前触れもなくそう訊いてきた。

「え？ どうしたの、理音ちゃん？ いきなり」

「やはは、いやぁ、あたしもここ数年親と会ってなくなってさ。ママの残した本のためにバイトまでして頑張ってる月葉見てたら思い出しちゃって。なんとなく訊いてみただけ。あっ、気分悪くしたらごめん！」

また拝み倒すように両手を合わせられた。周りの生徒から好奇の視線が集い、月葉は慌てて手を振る。

「えっと、それは別にいいよ。ていうか、理音ちゃんってもしかし

て家出してるの？」

「違う違う。まあ家は出てるけど、あたしんちは基本的に家族円満さ。今はちょっと都合で離れ離れになってるだけ」

海外転勤とかそういうった事情なのだろう。理音が少し寂寞とした表情をしたので、月葉はこれ以上追及しないことにした。

「で、月葉はどんくらい覚えてるわけ？」

「んと、正直言うとなんか全然かな。前にも言ったけど、あまり会ったことなかったから」

頑張って記憶も巡っても、やっぱりそれしか言えなかった。すると、理音が感心したように目を真ん丸に見開く。

「ほえー、それなのに頑張れるんだあ。月葉って凄いよ」

「全然覚えてないからだよ。だからお母さんのこと知りたいって思えるんだ」

「なるほどなるほど、言われてみればそうかもね。そんじゃあ月葉、ママの本のためにアルバイト頑張るなよ。あたしも応援してる。途中で投げ出したらストレートアームバーをかけるぞフフフフ」

空恐ろしい笑いを漏らしながら自分の腕をペシペシ叩く理音に、これは絶対投げ出せないと思う月葉だった。

昇降口を出たところであっさりと依姫を発見してしまった。

「あっ、あれって依姫ちゃんと……え？」

彼女は野球のバックネット裏にいたのだが——そこにはもう一人、綺麗な黒髪をした男子生徒もいた。

「ややや？　なんで依姫、ネクラ野郎と一緒にいるんだ？」

そう、是洞真夜だ。どうも二人でなにかをコソコソと話しているようで、人がいないバックネット裏で密会といった雰囲気である。

しばらく様子を見守っていると、真夜が突き放すようにその場を去っていった。残された依姫はどこかしゅんとした悲しげな様子だ。

——依姫ちゃん、なにを話してたんだろう？

不安げに依姫をじっと見詰める月葉を見て、理音が鼻息を荒げる。

「修羅場!？」　なにこれ修羅場!？　月葉の彼氏に親友が告白!　あたしの周りでもさかの三角関係発覚なのかつ!？　次回に続く!」

「落ち着いて理音ちゃん続かないから!　あと彼氏じゃないから!　断じて彼氏なんかじゃないからっ!」

すると、騒ぎ立てる月葉たちに気づいた依姫が小走りで駆け寄ってくる。

「月葉さんに理音さん、お恥ずかしいところを見られてしまったようですね」

依姫は少し照れたように頬を染めて微笑んだ。泣いた様子はないし、強がっているわけでもない。普段通りの彼女だった。

「依姫ちゃん、その、なんの話をしてたの?」

月葉が訊くと、依姫は少し逡巡するように口籠った。彼女は興味津々とメモ帳まで構えている理音をチラ見し――

「すみません、内緒です」

苦笑混じりにそう答えた。

「ムッフ、内緒と言われたら知りたくなるのが人の性!　甘い物でも食べながらじっくり話を聞かせてもらおうか。ねえ、月葉」

「理音ちゃん、そのニヤ顔もうやめない?」

「ケーキバイキングに行くのでしたね」

というわけで、三人は適当な会話をしながら商店街へ向かうことにした。

商店街は学校から徒歩で約十五分の距離にある。理音の言っていたケーキバイキングの店は月葉も知っていた。なにせバイトに行くため毎日商店街を通っているのだ。

「あつ、そうだそうだ月葉。午後の授業のノートなんだけど、後で見せてくれない?」

商店街通りに入った時、唐突に理音が月葉に頼み事をしてきた。

「え?　理音ちゃん、ノート取ってないの?」

「理音さん、ずっとお昼寝してましたもの」

理音とは席が離れているとはいえ、月葉は全然気づかなかった。それどころか先生も一切注意していなかったように思える。バレなかったのだろう。相変わらず彼女は曲者だ。実は月葉も五分ほど夢の世界へ旅立っていたことは秘密。

「ごめん、理音ちゃん。私も一部ノート取れてないから、依姫ちゃんに頼んで」

「バツキャロー、月葉！ 失恋で傷心中の友達にノート貸してなんて言えるかぁ！」

「あの、理音さん、わたくし別に失恋したわけじゃ……」

「てことは保留中？ 三角関係続行？ トゥービーコンティニュード？」

「いえ、ですから、そういうことではなくて――」

依姫が言いかけたその時――理音が急に立ち止まった。

そして具合でも悪そうに頭を抱えて蹲る。

「理音ちゃん？」

「どうされたのですか？」

月葉たちが近寄ると、彼女は「ヤバイヤバイヤバイ」と幽霊にでも取り憑かれたように連呼している。

顔を覗き込もうとした月葉に、深刻な表情の理音が掴みかかってくる。

「ヤバイようしよう月葉！ あたしテニス部に試合の助っ人頼まれてたんだった！ もうバイキングはすぐそこだけど……友達と依頼、あたしはどっちを選べばいいんだあ！」

なにがあったのかと思って心配した月葉だったが、どうやら大したことなさそうではあった。

「もう、ビックリさせないでよ理音ちゃん。それなら早く行っけなよ。バイキングは明日付き合ってあげるから」

「そうですよ、理音さん。試合の助っ人は明日だできません」

説得させられ、理音は二人に背中を向けて立ち上がる。

「うん、わかった。そだね。よし、ヒーローは遅れて登場しよう

じゃあないか！ 月葉、依姫、明日は絶対バイキング行くから予定空けときなよ！」

月葉と依姫はダッシュで来た道に戻っていく理音を見送る。そして彼女の姿が見えなくなってから、依姫が月葉を向いた。

「では、月葉さん、わたくしもバイオリンのお稽古がありますので」

「あれ？ 依姫ちゃんも用事あったんだ……」

「はい。ですが、サボるつもりでした」

てへ、とでも言うように依姫はチョロリと舌を出した。かくいう月葉もバイトがあるし、理音がなくなったためこれ以上寄り道をする気にはなれない。

依姫には訊きたいこともあったが、彼女は手早く別れの挨拶をすると駆け足でこの場を去っていった。実はかなり時間が危ないのかもしれない。

——まあいいか。バイトの時に真夜くんに訊けば。教えてくれるかどうかは激しく謎だけれど。

「君が来栖月葉嬢だね」

その時、背後から知らない男性の声がかけられた。

振り返ると、グレーの燕尾スーツを着た外国人男性が道の中央を通って歩み寄ってきていた。銀髪のロン毛を揺らし、切れ長の青い目がはつきりと月葉の姿を捉えている。

彼の歩き方は悠然としていて品がある。どこかの国のお金持ちかもしれない、とお金持ちの友人がいる月葉は直感した。

だがやはり、知らない人である。月葉に外人の知り合いはいない。「あなたは？」

「私の名はアドリアン・グレフ。魔導書使いだ」

魔導書使い。

——真夜くんと同じ……。

月葉は後じさった。魔導書使いが月葉に声をかけるなど、可能性

としてはただ一つしか考えられない。つまり、母親関係だ。

「待ちたまえ、別に君に危害を加えるつもりはない」

今にも逃げ出そうとしていた月葉をアドリアンと名乗った男は制した。本当に危害を加えるつもりがないことを証明するためか、両腕を大きく広げている。

「私に、なんの用ですか？」

「ふむ、単刀直入に言おう、君の母――来栖杠葉氏の魔導書を譲ってもらいたい」

「嫌です」

それしかないだろうと予測していた月葉は事前に返事を用意していた。

「金なら言い値の倍払おう」

「どれだけお金を積まれても譲る気はありません。それに今私はお母さんの魔導書を持ってません。だから帰ってください」

真夜に『預かって』もらっていることはもう構わない。そのうち必ず取り返してみせるからだ。しかし、この得体の知れない男に渡ってしまうと、魔導書の内容すら知ることなく二度と戻っては来ないだろう。

内容と言っても、魔導書の時点でなんらかの魔術だということはわかっていて。それでも月葉があの本を手離さないのは、ただ一冊だけ自宅に置いてあったからである。魔導書が暴走することを魔術界で有名だった母が知らないわけがない。わざわざ封印まで施して自宅に置いたのには、きっと意味があるのだ。月葉はそう信じている。

アドリアンが呆れたように肩を竦める。

「やれやれ、是洞日和氏の言った通りだ」

「！　　どういふことですか！」

彼の口から日和の名が出たことに月葉は動顛する。

「いやなに、君の情報は是洞日和氏から買ったのだよ。随分と金を積まされたが、来栖杠葉氏の魔導書が手に入るのなら安い買い物だ。

ただ、売ってくれないだろうとは言われていてね。実際その通りになっちゃった」

「日和さんが私を……そんなこと、あるわけない。嘘を、つかないでください」

日を重ねていくにつれて実の姉のように思ってきた彼女が、月葉を売った。とても信じられることではなかった。いや、信じたくない。

「嘘じゃない。人間誰しも心の隙を突けばなんだって話すものなのだよ」

アドリアンは項垂れる月葉を見下して不敵に笑い、

「第一段第一列」

「——ッ!？」

聞き覚えのある呪文を日本語で唱え、虚無の空間から一冊の魔導書を取り出した。

それからその魔導書を月葉に見せつけ、自慢するように語る。

「これは？曝露？の魔導書と言ってね。私の問いかけに対し強制的に『真実』を答えさせる力を持っている。もっとも、是洞日和氏のような上位の魔術師が相手だと、大金を握らせるなどして心に隙を作ってもらう必要があるがね」

——じゃあ、日和さんはあれで……。

日和が自らの意思で月葉を売ったわけではないと知って安堵すると同時に、そこまでのこの男を月葉は善人だとはとても思えなかった。正直、暴漢に絡まれるよりも怖い。

——逃げないと！

「だから待ちたまえと言っている」

「きゃっ!？」

今度こそ本気で逃げようとした月葉の腕を、アドリアンが魔導書を持っていない右手で掴んだ。そのまま力任せに月葉は引き寄せら

れる。

「だ、誰か！ 誰か助けてください！」

大声で叫ぶが、誰一人として月葉を助けにくる勇者は現れなかった。それどころか――

――嘘っ……なんで？

月葉は驚愕する。普段は活気に満ち溢れているはずの商店街に、人っ子一人としていなかったのだ。

「この辺りには？ 人払い？ の魔導書の力が働いていてね。呼んだところで誰も来やしない。君の友人たちが最後だったよ」

理音と依姫が別れたのは偶然ではなく、アドリアンの仕業だったのだ。

――やだ……こんなのやだよ……。

「さて、危害を加えないと言った手前悪いが、次は君が口を割る番だ。さあ、私の目を見ろ。――来栖杠葉氏の魔導書はどこにある？」

アドリアンの持つ魔導書が強烈に輝き、その光が月葉を包む。どこか生温く気持ち悪い感覚が体を侵蝕していくように広がる。

「あっ……」

頭がぼーっとしてきた。視界もぼんやりする。自分がなにを考えているのかすら、もう月葉にはわからなくなっていた。

「お母さんの、魔導書は」

口が、月葉の意思とは無関係に言葉を紡ぐ。

「貴様、なにをやっている？」

寸前、誰かがアドリアンの右腕を掴み上げた。彼に捕まっていた月葉は突然の解放に尻餅をつく。

「……何者かね、君は？」

？ 曝露？ の魔導書の光が弱まる。月葉の意識が鮮明になっていく。そこにいたのは――

「一般人に魔導書を使うような下衆に、この僕が名乗るとでも？」

——真夜くん！
だった。

時は少し遡る。

是洞日和は悔やんでいた。

――マズったわ。どうしよう？

大金を握らされて浮かれてたとはいえ（あの後三百万ぼったくった）、まさかアドリアンが？曝露？の魔導書を持ち出してくるとは思いもしなかった。

日和が上級魔術師だったことが災いし、その抵抗力から『どこにあるか』の質問に対して所持している真夜ではなく、持ち主である月葉のことを喋ってしまった。

真夜だったら日和がここまで悩むことはなかった。しかし、月葉だと話は別だ。

彼が物理的に一般人を傷つけるとは考えたくないが、あの手の魔術師はどんなことをしても目的の物を手に入れようとするだろう。

アドリアンの魔書閲覧ライセンスは二級だ。そして？曝露？の魔導書も二級。人を意のままに操るような力を持った魔導書はまず持っていないと考えられる。だが、まだ魔術師見習いですらない月葉に対してだと？曝露？だけでも強力過ぎる。

月葉に連絡を取りたいところだが、生憎と彼女は携帯電話を持っていないらしい。

大丈夫だとは思いたいけれど、念のため対策は打っておかなければ安心できない。

日和は会計台に放置していた携帯電話を手に取り、登録していた番号にかける。

「もしもし、真夜？ うん、ちよつとめんどくさいことになっちゃって」

簡単に状況説明をし、通話を終える。

日和は会計台上のノートパソコンを見る。

——書いてる場合じゃないわよねえ。

パソコンをスリープ状態にし、一応店の防犯術式も稼働させ、日和はアドリアンを探して外へ飛び出した。

短いので昼ごろにもう一話更新します。

是洞真夜がアドリアン・グレフと対峙している。

月葉はただその光景を、ペタンと地面にお尻をついた状態で呆然と眺めていた。まだ靄のかかった頭で考える。

——真夜くんが、助けに来てくれた？ 私を？

なぜだかわからないが、月葉は純粹に嬉しさが込み上げてきた。

「君、今なんと言ったのかね？ 聞かなかったことにするからもう一度言いたまえ」

プライドを傷つけられたのか、アドリアンはわなわなと震えている。真夜は漆黒の瞳でそんな彼を見据え、

「フン、貴様のような下衆の屑に、僕の名を覚えられたくないと言ったんだ」

さらにプライドを引き裂くようなことを口にした。鼻息の鳴らし方もいつも以上に見下した感がある。

アドリアンは端正な顔に引き攣った笑みを浮かべる。

「ふむ、どうも最近耳の調子が悪いようだ。この国の言葉では『三度目の正直』と言うのだったか？ もう一度チャンスをやろう」

「飾りの耳なら切り落としてしまえばいい。少しは身軽になれるぞ」
ブチン！ と月葉はアドリアンの額から変な音を聞いた気がした。

青筋が浮き出ている。初対面の人を怒らせる技術に関して真夜の右に出る者はそうはいないだろう。

「君、元とはいえ貴族の私を侮辱したこと、まさか許されるとは思っていないだろうね？」

「知るか」

見ている月葉の方が焦ってしまいうくらい真夜はバツサリと切り捨てて。月葉も魔術師になればこれほどの余裕を持てるのだろうか。いや、きっと無理だろう。

「？人払い？が効いていないということは、君も魔術師だね。私に

対する無礼は見逃してやるから、さっさと消えてくれたまえ。私はそのレディーに用があるのだよ」

指を差され、月葉はビクリと怖気づく。ひう、と小さな悲鳴も上げてしまった。

すると、アドリアンの指先から庇うように真夜が背中中月葉を隠してくれた。それから聞こえない音量でなにかを唱え――

「貴様の用というのは、こいつのことだろう？」

書棚？から取り出した一冊の魔導書をアドリアンに見せる。それは紛れもなく月葉が『預かって』もらっている来栖杠葉の魔導書だった。

アドリアンが瞠目する。

「そうか、なるほど、君も魔導書使いだったか。そしてそれが私の探し求めている来栖杠葉氏の魔導書。……ククク、これは面白い」

忍び笑いをするアドリアンの目つきに鋭さが増す。彼はもはや月葉を見ていなかった。真夜が魔導書を見せつけることでアドリアンの対象を自分へと変更したからだ。

「いいかね、君は私を侮辱した。その謝罪はきっちりしてもらわねばならない。その魔導書を私に渡すという形だね」

「フン、なぜそこまでこれに拘る？」

「拘って当然だ。私は魔書コレクターなのだよ。来栖杠葉氏の魔導書は複雑過ぎて初級だろうと複製は困難。つまり、彼女の魔導書はどれも世界に一冊しか存在しない。それを入手したいと願う魔術師に理由を聞くなど野暮だとは思わないかね？」

アドリアンは青い瞳にどこか狂信的なまでの執着心を宿してそう語った。

魔書コレクター。確か依姫の祖父が古書コレクターだったことを月葉は思い出す。その魔書版ということだろう。

「君も魔導書使いなら、私の趣味はわかるのではないかね？」

アドリアンは真夜を説得しようとしているようだ。だが、真夜ならここで『くだらん』と一蹴するはずである。

——言って、真夜くん。そんな趣味などくだらないって。

月葉は期待の眼差しで真夜を見詰める。が——

「……」

真夜はだんまりだった。

——あれ？

趣味、わかるらしい。そういえば彼は常に本と共にある。アドリアンほどの執着心は見せないが、実は彼もけっこうな魔書コレクターなのかもしれない。ようやく納得してきた頃なのに、再び彼に母の形見を『預けた』ことが不安になってきた月葉である。

「悪いが、こいつは預かり物だ。貴様に渡すことはできん。それに、貴様のやり方は気に喰わない。コレクターならコレクターなりの礼儀があるだろう。一般人に手を出すな」

前言撤回。やはり真夜ならば信頼できそうだと月葉は思い直した。

「……ならば仕方ない」

アドリアンは？曝露？の魔導書を虚空へと消し、踵を返して二人から離れる。わかってくれたのかと月葉は思ったが、違った。

彼は十メートルほどの距離を空けて立ち止まると、振り返ってビシッと名探偵が犯人を示す時のような動作で真夜を指差す。

「決闘だ。名も知らぬ魔導書使いよ。私が勝てばその魔導書を譲ってもらう。君が勝てば私は潔く諦めようではないか」

彼の表情はいわゆるどや顔というやつだった。

「……いいだろう」

「ちよっ！？ 真夜くん勝手に決めないでよっ！？」

賭けられた来栖杠葉の魔導書は一応月葉の物なのだ。所有者を無視してそういう話はしないでもらいたい。

慌てる月葉を、真夜は下がっているとでも言うように手で諫めた。そして彼はまっすぐにアドリアンを睨む。

「ただし、僕が勝った時の条件に一つ加えさせてもらう」

「なんだね？ 言ってみたまえ」

余裕綽々のアドリアンに対し、真夜は変わらない無表情で、

「こいつに謝れ」

端的にそう言って、親指で後ろの月葉を示した。

「え？ え？ え？」

かああああ。

真夜の言葉の意味が理解できずに困惑する月葉だったが、どうい
うわけか体中が熱を帯びてきた。恥ずかしいと感じる時に似た熱さ。
すぐそこにある洋服店のショーウィンドウに映る自分を見ると、耳
まで真っ赤になってトマトみたいだった。

——あれ？ なんで？ え？

わけがわからず頭を振って狼狽する月葉に、来栖杠葉の魔導書を
？書棚？に仕舞った真夜がぶっきら棒に告げる。

「お前は邪魔だ。その辺に隠れている」

「は、はい！」

反射的にいい返事をして立ち上がってしまう。それから月葉の体
は勝手に動き、真夜の言う通りに少し離れた電柱の陰に隠れた。

「謝れ、か。そんなことでよいのであればいくらでも謝ってやろう。
君が勝てればの話だがね。——第一段第二列」

「僕に勝てる気にいるのか？ とんだ自己陶醉者だな、貴様は。――
第三段第四列」

お互いが？書棚？から魔導書を抜き、ページを繰る。

そして――

「――？火弾？！！」

重なる声と共に、双方から灼熱の業火球が飛び出し中央で激しく
衝突した。

轟く爆音。衝撃波が風となって吹き荒れる。電柱にしがみついていなければ、月葉など暴風時の空き缶のように転がり飛んでいたことだろう。

熱風に髪を靡かせながら、月葉は思う。

——今の、同じ魔導書……？

アドリアンは言っていた。来栖杠葉の魔導書は複製できない、と。つまり、複製・量産できる魔導書もあるということだ。

「ふむ、初級魔導書で相手の出方を窺う。君も子供ながらになかなか戦い慣れしているようだね。それとも、初級しか扱えないただの初心者かね？ だったらこの私が魔導書戦の手解きをしてあげよう」

アドリアンは完全に真夜を侮っている。大人の余裕がそうさせているのだろうが、真夜は馬鹿にされても全く心を揺るがせていない。

「フン、ごちゃごちゃとやかましい奴だ」

「なんだと？」

それどころか逆に挑発している。アドリアンは元貴族のプライドのためか、真夜と違って沸点が低いようだ。これではどちらが子供かわからない。

「少々大人げないと思っていたのだがね、やめだ。君には手加減しないことにしよう——第十段第三列」

怒りで顔を沸々とさせながらも、アドリアンは冷静を装って魔導書を入れ替えた。

すると、アドリアンの両脇にオレンジ色の炎が点火する。それは一瞬で空中を燃え広がり、二つのリング状の形を成した。

「灰になりたまえ！」

アドリアンが魔導書を持っていない方の手を薙ぐと、煌々と燃え盛る火炎のリングは商店街通りの店々を破壊しながら宙を転がった。決して狭くはない通りであるが、巨大な炎を前に逃げ場などない。

「？炎輪？の魔導書か。くだらん芸だ」

真夜は迫りくる火炎のリングをまっすぐに見据え、手にしている魔導書を前方に翳す。

瞬間、真夜を覆うように半球状の光の層が形成された。火炎のリングは光の層と衝突し、形が崩れ、やがて霧散する。いつの間に魔導書を変えたのか、炎輪に気を取られていた月葉には気づかなかった。

「ほう、？粹護？の魔導書かね。……そうか、君のライセンスは三級だな。なるほど、丁度自分の力を過信したくなる時期だろう。だがね、私は二級なのだよ。喧嘩をする相手を間違えたと後悔し謝るのであれば、君の無礼は許そうじゃないか」

そう言いつつも、立て続けに火炎のリングを飛ばすアドリアン。複数の炎輪で攻め立てることで謝罪する暇など与えないつもりらしい。憎たらしい笑みすら浮かべていて、月葉は正直気持ち悪いとすら思った。

真夜は防戦一方だった。炎輪を光の層――？粹護？の魔導書で防いでいるが、そこから動くことはできないようだ。もし？粹護？の魔導書を解除した場合、その瞬間に彼は炎で焼かれてしまう。

――真夜くん……。

月葉は心配になって眉を顰める。炎輪を受けた時に光の層が大きく揺らいでいるところを見ると、真夜の防御が破られてしまうのは時間の問題と思えてならない。

「はははっ！ どうした？ なにもできないのかね？ これでわかっただろう？ 君は所詮その程度だと――」

哄笑するアドリアンの言葉が途中で切れた。

トン、と地面を蹴った真夜が、自分から光の層を飛び出したからだ。彼は炎輪を器用に掻い潜り、一鼓動の内にアドリアンとの間合いを詰める。

「なっ！？ 速っ……」

「たかが二級で、自惚れているのは貴様の方だ」

肉薄した真夜は足払いでアドリアンを蹴り倒す。そして凄みのあ
る黒い瞳で睨み下ろし、

「第八十段第一列――」

真夜は淡々と？書棚？の位置を唱え、魔導書を交換する。

「――？魔剣？」

新たに抜き取った魔導書がぐによりと歪み、巨大な両刃剣の姿に
変異した。

剣身は幅広く禍々しい緋色。蛇が締めつけているようなデザイン
の鰐と柄は光沢のある黒一色で統一されている。一目見ただけでゾ
ッとする不気味な威圧感に、月葉は声も出せないでいた。

大上段から躊躇の欠片もなく振り下ろされた魔剣を、アドリアン
は紙一重で転がって避ける。

「は、八十段だと？ それに？魔剣？の魔導書……超一級レベルじ
やないか」

目を剥くアドリアンは？炎輪？の魔導書を地面に転がったまま発
動させる。しかし、真夜は魔剣を一振りするだけで二つの火炎のリ
ングを消滅させた。

「は……？」

呆気なく攻撃を掻き消されたアドリアンが間拔けた声を漏らした。
完全に真夜のペースだ。先程までの威勢は既にアドリアンにはない
ようである。

だからか、彼はヤケクソといった様子で炎輪を飛ばした。もう別
の魔導書に変更する余裕も残っていないのだろう。

「無駄だ。この魔剣は魔力を喰らう」

だがやはり、炎輪は真夜が魔剣を振るう度に蠟燭の火のように消
されていく。

「あ……ありえん……」

歩み寄る真夜。じりじりと後じさるアドリアン。まるで蛇に睨ま
れたカエルだと月葉は思った。

「くっ、分が悪いか。仕方ない。ここは戦略的撤退を……」

「あつ、逃げた!？」

月葉は驚きのあまり叫んでしまった。彼はプライドが高いと思っていたのに、なんとも潔い決断だ。そもそも、自分から決闘を申し込んでおいて逃げるなんてアリなのだろうか。

「第六十三段第十四列――」

が、戦意を失い逃走を図ったアドリアンにも真夜は一切容赦しない。魔剣を持った状態でさらに新しい魔導書を手に取った。

バチッ。開かれたその魔導書から青白い火花が散ったのを、月葉は見逃さなかった。

――あれは……もしかして？雷獣？の魔導書？

紀佐桐吾から買い取り、真夜が昨日解読していた物だ。

三本の雷撃が？雷獣？の魔導書から迸る。それらは青白くスパークする狼の姿となって一目散に遁走するアドリアンの進路を塞いだ。「どわああっ!？」

雷音の唸り声を上げる雷獣たちに包囲され、アドリアンは腰を抜かす。その表情は涙と鼻水でくしゃくしゃになっていた。もはや貴族の威厳もあったものじゃない。

「魔導書の多重使用……あ、ありえん。三級魔導書使いにそのようなことができるはずがない。そうだ、これはきつと悪い夢に違いない」

「まだ勘違いしているのか？ 見た目通りの馬鹿だな」

魔剣の切っ先をアドリアンに突きつけ、真夜が見下すように言う。

「僕のライセンスは特級だ。力の差を見極められない雑魚が。逃げるのは構わんが、負けを認めて謝罪してからしろ」

苛立たしげに吐き捨てる真夜を、アドリアンは鬼か悪魔を見たような驚愕に震える瞳で見上げる。

「特級だと？ ふ、ふざけるな。そんな世界でも十人といない魔術師が、こ、このような辺鄙な田舎都市にい、いるはずがない」

アドリアンは声も震えていた。

「信じる信じないは貴様の自由だが、少なくとも貴様では僕には勝

てない。それは証明できたはずだ」

「しかしだね」

「謝れ」

「……わ、私の負けだ。申し訳ない。この度の無礼、この通り謝罪する」

真夜に威圧され、アドリアンはその場で両手両膝をついて頭を深く下げた。日本人でもなかなか真似できない綺麗な土下座だった。

「僕にじゃない。あいつに謝れと言っている」

真夜に手招きされたので、月葉は電柱の陰から出てとてとてと彼らに駆け寄った。

それから――

「本つつつ当に悪かった！ 君に乱暴を働き、？曝露？の魔導書まで使おうとしたことをどうか許してはくれないか！」

額をアスファルトの地面に埋めそうな勢いで謝罪された。

「いえ、その……はい、許します。だから土下座をやめてください」
謝られているこちらの方が恥ずかしくなったため、月葉の彼に対する怒りはどこかへすっ飛んでしまった。それにここまでされると、なんか彼が可哀想に思えてくる。

「お母さんの魔導書、諦めてくれますよね？」

確認のために訊くと、立ち上がったアドリアンは紳士然と首肯した。

「元貴族として約束は守ろう。しかし、コレクターとしてはそう易々と諦め切れるものではないのだよ」

「そんな、それだと約束と違います」

「違うないさ。諦めてはいないが、私から君に来栖杠葉の魔導書を譲ってほしいとはもう言わないと神に誓おう。あれほどのことをした私を許してくれた優しい君だ。そんな君に強引な手段を取ることも、貴族としてもコレクターとしてもできないのだよ」

真摯にそう告げ、アドリアンは白い歯を見せて微笑んだ。根は悪い人ではないのかもしれない、と月葉は彼に対する印象を改めるこ

とにした。

「ただ、私はしばらくこの街に滞在することになっている。もしも気が変わったら駅前にあるロイヤルホテルのスイートルームを訪ねてくれたまえ」

気障ったらしく言うと、アドリアンは名刺を月葉に手渡した。名刺の裏には滞在先のホテルの名と住所が手書きされており、街で最も高級なホテルだとわかった。

「で、では、君の素敵なボーイフレンドに睨み殺されかねるので私はこれで失礼しよう」

アドリアンはさっと踵を返し、真夜から逃げるように早足で立ち去った。

残された月葉は――真夜と二人きりである。

「……」

「……」

――なんか気まずい！

目を合わす勇気を持っていないでいる月葉が横目で見ると、真夜は三体の雷獣を消し、魔剣を本に戻して？書棚？へと仕舞っているところだった。

なによりも先に、月葉は礼を言うべきだろう。

「あの、えっと、真夜くん」月葉は自分でも変だと思うほどもじもじしながら、「その、助けてくれて、ありがとう」

「フン、依頼人を護るのも仕事の内だ」

真夜の素っ気ない答え。彼らしいと納得するも、自分だから助けたというわけじゃないとわかってどこか寂しい気持ちになる月葉だった。

――なんか私、変。真夜くんの顔をまともに見れない……。

一体自分はどうしたのだろうかと思んでいる月葉に、「おい」と真夜が声をかけてくる。

「え？　な、なにかな？」

「ぼけっとするな。逃げるぞ」

「はい？」

真夜の言っている意味がわからずきよんとする月葉。

「周りを見る。奴が去ったから？人払い？の魔導書の効果が切れて直に人が戻ってくる。お前、この状況を説明できるのか？」

彼に言われて月葉は辺りを見回し、絶句した。決闘のとぼちりを受けた数々の店舗が、半焼半壊という痛々しい状態で並んでいたのだ。その中には明日理音たちと行く約束をしていたケーキバイキングの店もあった。

ほとんどアドリアン一人のせいである。人が戻ってきて月葉たちが問い詰められるのはあまりにも理不尽だ。

「残るなら勝手に残れ。僕は知らん」

「あっ！ ま、待ってよ真夜くん！？」

駆け去る真夜の後を追うため、月葉は縛れそうになる足を懸命に動かすのだった。

慌てた様子で周囲をキョロキョロしている日和を見かけたのは、商店街を丁度中心から二分する大通りに出た時だった。

「日和さん！」

月葉が手を振りつつ声をかけると、こちらに気づいた日和は探し物が見つかったような顔をして駆け寄ってきた。

「月葉ちゃん大丈夫！？ あの貴族崩れのアホそうなヘンタイに変なことされてない！？」

「ひゃっ！？ だ、大丈夫ですよ日和さん！ 変なことされましたけど大丈夫です！ 真夜くんが助けてくれましたからッ！！」

体中をペタペタと触ってくる日和に月葉ははわはわと狼狽する。女同士だからといっても公衆の面前でそういうことをされると非常に恥ずかしい。こっちの方こそ変なことだ。

「変なことされたのね！？ よーし、ちょっと待ってて月葉ちゃん。お姉さんが正義の魔術師としてあのヘンタイを懲らしめてあげるわ。具体的には雷系統の魔術で意識を保ったまま全身麻痺させた後にドラム缶に詰めてコンクリ流して東京湾に沈める感じね」

「そ、そんなことしなくていいですから！ アドリアンさん死んじやいますから！」

「あれ？ 月葉ちゃん的には富士の樹海に埋める方が好み？」

「違います！」

正義の魔術師というのはそんなどこかのマフィアみたいなことをするのだろうか。というか、後半は全く魔術関係ない。

暴走気味の日和を鎮めるのに三分ほどかった。

「ごめんね、月葉ちゃん。私も真夜に連絡した後すぐ店を出たんだけど、間に合わなくて」

「謝らなくていいですよ。日和さんこそ、大丈夫なんですか？」

日和もアドリアンに？曝露？の魔導書を使われている。あれは自

分の意識を乗っ取られるような嫌な感じだった。真夜のおかげで
ぐ解放された月葉はともかく、日和にはなにか後遺症があるかもし
れない。

そう心配になる月葉に、日和は屈託のない笑みを向ける。

「問題ないわよん。なんたって私は一級だからね」

「フン、そもそも姉さんがあの男に不覚を取るのが悪い。一級が聞
いて呆れるな」

と、真夜が冷静に指摘する。うつ、と痛いところを突かれた日和
は極まりが悪そうにたじろいだ。

「でもね、一矢報いたとは言えないかもだけど、あの男から五百万
ぶん取ってやったわ」

「金に目が眩んで隙を見せたということだろう？」

「いい、月葉ちゃん？　こんな風に文句ばかり並べる男には捕ま
っちゃダメよ？」

「話を反らすな」

珍しく真夜が上位に立っている。いつもは飄々とした日和に振り
回されがちの真夜だが、こういう場合もあるのだな、と月葉は感心
半分で二人の遣り取りを眺めていた。

ぐだぐだと説教を垂れる真夜に、やがて日和はなにかの糸が切れ
たように激昂する。

「あーもう！　終わったことをねちねち穿り返す男はモテないわよ
！　そんなことよりあのヘンタイからぼったくったお金でなにか食
べに行かない？　月葉ちゃん、焼き肉とお寿司、どっちがいい？」
「ふえ！？」

唐突に話を振られた月葉はビクツと慄いた。

「ど、どっちでも……」

「じゃあ、お肉にしましょう。一度入ってみたかった高そうな店が
あるのよ。そこ行くわよん」

「あの、私も一緒にいいんですか？」

「いいのいいの。お金ならあるからね」

ドシドシと効果音がつきそうな勢いで歩き始める日和。実は相当に今回のことを悔やんでいたのだろう。さらにそこを真夜が日頃の恨みとばかりに掘り返すものだから、溜まっていたストレスが爆発したのかもしれない。

「さあ、締切のことなんて忘れてお腹いっぱい食べるわよん！」

どうやらそちらのストレスの方も誘爆してしまったらしい。

「……フン」

真夜は鼻息を鳴らして黙って日和についていく。そんな彼に月葉も並ぶ。日和のテンションに巻き込まれたおかげか、先程まで彼に對して感じていたなんとも言えない感覚は薄れていた。

そして、思い出すように月葉は訊ねる。

「あの、真夜くん？　ちょっと訊きたいことがあるんだけど？」

「……なんだ？」

一回も無視されなかった。そのことに喜びを覚えた月葉は、ずっと気になっててもやもやしていたことを口にする。

「えっと、その、バックネット裏で依姫ちゃんとなにを話してたのかなあって……？」

胸の前で人差し指同士をつんつんしながら俯く月葉。本人たちの片方がいないためか、なんとなく訊くのが恥ずかしかったのだ。

「お前に話す必要があるのか？」

「依姫ちゃんは友達だから、知っておきたいの。あの後ちょっと元気なさそうだったし。それと、お前じゃなくて『月葉』だよ。日和さんに聞かれたらお肉に魔術かけられるよ？」

言うのと、焼き肉屋が大惨事になるイメージでもしたのか真夜は深々と溜息を吐く。

「紀佐は僕に魔術を教えろと言ってきたんだ。それもあの時だけじゃない。僕が魔術師と知ってから何度断っても毎日のように頼み込んでくる。あいつほど鬱陶しい人間を僕は知らん。おま……月葉、友人ならどうにかしろ」

とんでもなく迷惑そうに真夜は語った。月葉の名前もまだ言い難

そうだ。

ただ、月葉は思う。

——ああ、やっぱり。
と。

依姫の趣味や一般人の理音を避ける風な行動から、『そうだろうな』とは薄々考えていた。だが、予想が当たっていたこと以上に安堵している自分に月葉は気づく。たぶん、真夜が断っていたからだろう。月葉としては、依姫まで魔術の世界に本格的に浸かってほしくないのだ。依姫にとっては落胆ものなのだろうけれど……。

「ふふっ」

思わず笑みが零れ、月葉はほっと胸を撫で下ろす。

「なにを笑っている？」

「なんでもないよ」

怪訝そうにする真夜にそう返し、月葉は前を歩く日和の下へと駆けていった。

薄青色に輝く複雑な魔法陣が、大理石の台座を中心に広がっている。

これは？解析？の魔導書による、魔術の構造・効果などを分析するための魔法陣だ。

台座自体には魔術的意味はない。だが、役割は二つある。一つは直接解析を行うと壊れてしまう対象物があるため、それを保護すること。もう一つは間接的に解析することで術者の負担を軽減することだ。

普通なら魔術道具や魔術のかけられた一般物を置く台なのだが、現在乗せられている物は強力な封印がかけられている魔導書だった。魔書作家・来栖杠葉が作成した魔導書。

複製することが非常に困難な、世界でたった一冊しか存在しない魔導書の一つである。

それと、恐らくこの魔導書は一度も魔術界に出回っていないだろう。どうも作られてからこれまで、来栖家の倉庫に放置されていたようだからだ。

「……」

そんな謎だらけの魔導書と？解析？の魔導書とを交互に見ながら、是洞真夜は解析結果で埋められたページを捲る。？解析？の魔導書に自動的に浮かび上がってくる文字は魔術的暗号文字であり、一般人はもちろん、並の魔術師でも一ページを理解するのに数日はかかるだろう。

だが、真夜は並の魔術師ではない。

魔術師協会『白き明星』から認められた、世界で十人といない特級閲覧ライセンスを持つ魔導書使いである。それほどの実力がある真夜でも、この来栖杠葉が施した魔導書の封印には苦戦を強いられていた。

浮かび上がる解析結果はほとんどがフェイク。なんの意味もない記号の羅列に過ぎない。一級魔導書を一時間とかからず読み解ける真夜だからこそ、瞬時にそうわかるのだ。

——一体どこまで複雑な封印をかけているんだ、来栖紅葉。

彼女も特級魔術師だったと聞いている。というか、そもそも魔書は高位の魔術師でなければ作れない。なぜなら、魔術を研究・開発している者は基本、魔力を持たないただの魔術師たちだからだ。通常の魔術を使えない魔導書使いは、彼らの研究成果が魔導書になることを待っているしかない。

魔力を持つ者が魔術師になれるというイメージが世間では強いだろうが、逆だ。魔術という力は、定められた手順で自然からエネルギーを集束し、魔力に変換して利用することで超常的な現象を引き起こす技術のことである。本来なら、それを行えない魔力の素養がある者は魔術師にはなれなかった。

魔導書が生まれるまでは。

昔の魔術師たちは煩わしい魔術の手順を無視するために魔導書を開発した。魔導書にはその術式の手順・意味・条件など全てが凝縮され、いつでも発動可能となるはずだった。

しかし、魔導書は所詮人工物である。魔術を発動できるほどの魔力を自然から供給するには、とても看過できない時間がかかることが判明した。

そこで魔術師たちは、魔力の素養のある者に魔導書を使わせることを思いついた。それが真夜やアドリアンのような魔導書使いである。

だからといって、真夜は魔術師が魔導書使いの上位存在だとは思っていない。

——特級魔術師の封印術式は特級、ということか……面白い。

魔導書使いは魔導書がなければただの人。だが、魔導書があれば魔術師よりも速く確実に術を使うことができるのだ。

——僕が、必ず暴いてやる。

薄青の輝きが強さを増し、？解析？の魔導書に記されていく暗号文字も加速する。

凄まじい速度で浮かび上がってくる暗号文字の羅列を、真夜は一文字たりとも見逃さず目で追っていく。

来栖月葉の依頼だからというわけではなく、真夜は純粹にこの魔導書のことを知りたいと思っている。魔術師や魔導書使いなんて関係ない。貪欲なまでの知識欲と好奇心は、魔術に関わる者全てが持ち合せていることだろう。それは真夜だとして例外ではないのだ。

本なら今日の分の解析は終わっている。これ以上続けると真夜の精神は赤信号を点灯させることになる。

でも、真夜はやめなかった。

アドリアンと決闘したあの日から二日が経過し、ついに解析に目途が立ったのだ。

——今日中に、終わらせてやる！

その意気込みと集中力は、姉が心配して様子を見に来たことにも気づかないほどだった。

時刻はとくに午前零時を回っている。

真夜の精神力は限界に近づいている。

流石にやり過ぎたと真夜が思い始めた、その時だった。

？解析？の魔導書に記された暗号文字が、薄青く輝いたのだ。

その意味を理解した真夜の目が驚愕に見開かれる。

「これは……」

片肘を机に置き、掌に頬を預けるようにして来栖月葉は浅く溜息をついた。

ここ二日間、月葉はバイト先に行っていない。日和が小説の執筆を終えるまでは魔術師修行も保留になるし、その日和から『頑張り過ぎだから少し休みなさい』と言われたので月葉はお言葉に甘えることにしたのだ。

——だけど、お店大丈夫かなあ？ 日和さん、放つとくともみ屋敷にしそうだし。

しっかり者の月葉としてはそこが心配でならなかった。日和の小説の締切は確か今日だったはずなので、少し覗きに行ってみるのもいいだろう。追い詰められて奇声を上げている姿が目には浮かぶ。

「でさでさ、まだ捕まっていなかったって、例の放火魔」

「怖いですね。もしあの時ケーキバイキングに行っていたら、わたくしたちも巻き込まれていたかもしれませんし」

真夜がいるからごみ屋敷レベルの惨事にはならないと思いたいが、彼は基本的に地下書庫に籠ったまま出てこない。酷い時には食事も睡眠もそこで取っているのだとか。どこまで本の虫なのだ、と月葉は嘆息した。

——真夜くん、か。

彼がアドリアンから月葉を救ってくれた時のことを思い出す。あのまま彼が来なかったとしても、アドリアンは彼と衝突して結果的に敗北していただろう。けれど……

——ちよつと、かっこよかったかも。

真夜が来なければ、アドリアンが月葉に謝罪することなかったはずだ。

「ねえ、聞いてんの？ 月葉？」

「先程からぼーっとされていますが、ご気分でも悪いのですか？」

「え？」

話しかけられて月葉はハッと正気づく。目の前では八重澤理音が机から身を乗り出して月葉の顔を覗き込んでおり、その横で紀佐依姫が心配そうに月葉を見ていた。

今は昼休み。友人たちと机を寄せて昼食を終え、そのまま三人で談笑していたのだった。

「ご、ごめん。えっと、なんの話だっけ？」

「あーっ、やっぱり聞いてない！ もう、この前の放火魔の話だよ」理音が膨れっ面で椅子に踏ん反り返った。放火魔……困ったことに月葉はその犯人を知っている。というか、月葉も無関係ではない。人払い？の魔導書のおかげで人的被害は出なかったものの、決闘の場所を変えてもらえばよかったと後悔している。もっとも、あの時はそんなことを考えられる余裕などなかったが……。

月葉はとりあえず笑って話を合わせておくことにした。

「あはは、そうだったね。商店街って今どうなってるの？」
あれからバイトに行っていないため、月葉は商店街のその後を知らないのだ。

依姫が顎を指で持ち上げるようにして答える。

「確か、外国の富豪の方が支援金を出されたとかで、徐々に復興していると聞いています」

「そこがわかんないよね。あんな近くに大型デパートでもできたら一気に寂れそうな商店街にお金出すなんてさ。見返りもなしでだよ？」

「理音さん、人の善意を疑っては失礼ですよ」

「そ、そうだよ。きっとなんか思い入れがあるんだよ。たぶん」

その人が犯人です、とは口が裂けても言えない月葉だった。

「あ、次の授業ってなんだったっけ？」

そろそろ話題を別の物にシフトしないとボロが出そうだ。そう思った月葉が机の中に手をつっ込むと――くしゃり。

「？」

入れた覚えのない四つ折りのメモ用紙がそこから出てきた。疑問に思った月葉がそれを広げてみると――

【今日は必ず店に来い】

とだけ書かれてあった。

――これ、もしかして真夜くん？

店に来いということは……本当にごみ屋敷になったから掃除しろということだろうか。それとも、例の件でなにか進展があったのか……。

ドクン。後者だったことを考えると、月葉の胸の鼓動が緊張で高まった。

「月葉、それなに？　――ハッ！　まさかラブレターってやつ！？　うわーっ、三角関係どころか四角関係になりそうな勢い！？」

「え？　あ、違うって理音ちゃん！　それに三角関係とかそういうのじゃないって依姫ちゃん言ってたよね！」

「そうですよ、理音さん。あれはその、先生に言伝を頼まれただけです」

依姫が弁明している間に月葉は教室を見回してみる。といっても真夜は昼休みにはいつも図書館にいるから見つかるはずがない――と思っていた。

――あれ？　教室にいる？　なんで？

珍しいこともあるものだ、と月葉は廊下側の席に座っている真夜を観察する。どうも誰かと会話をしているらしい。これもまた珍しいことだ。

真夜の会話の相手は、爽やかそうな顔をした長身の男子生徒だった。クラスメイトではない。ということは、別のクラスからやって来たのだろう。

「あー、あれは椎橋陽だよ」

と月葉の視線に気づいた理音が言う。

「知ってるの、理音ちゃん？」

「月葉さんは知らないのですか？ 校内でも有名な方ですよ。中学の全国体操競技大会で好成績を残されていて、体操部の期待の新星と評判です。性格も気さくで誰に対しても優しく、一組では確か学級委員に推薦されたとか」

「へえ」

月葉は感嘆の声を漏らした。ついでにイケメンとくれば、男女問わず様々な意味の込められた視線がクラス中から集まるというものである。

真逆の属性を持つ是洞真夜と会話していなければ……。

「椎橋陽はあのネクラ野郎と小学校からの付き合いらしいよ。なんでもネクラ野郎を体操部に入部させたいとかで時々ああして誘ってるんだってさ。本の虫のくせに運動できるっぽいから」

確かに真夜がアドリアンと戦った時に見せた動きは常人離れしていた。禍々しい大剣を軽々と振り回している姿を月葉は脳内で再生する。

——でも、真夜くんが、体操？

続いてあの真夜がいつもの無表情でウルトラCを決めている姿を想像してしまい、月葉は思わず吹き出しそうになった。

「理音さん、よく知ってますね。それはわたくしも知りませんでした」

「ふふん、この理音様はなんでも知っているのだ」

「なんでもですか？ では現在のスロベニア共和国大統領の名前を仰ってみてください」

「え？ あー、いや、その、そういうのはちょっと……」

そんな遣り取りをしている理音と依姫を残し、月葉は席を立った。椎橋陽と真夜の会話が終わったようなので（様子からして勧誘は失敗）、先程のメモ用紙について直接彼に訊いてみよう思ったからだ。

「真夜くん、今日は図書館じゃないんだね」

まずは簡単なコミュニケーションを計ってみるが、

「……」

無視された。最近はきちんと応答してくれていたから、月葉は少々ムツとする。

「ちよつと、無視しないでよ真夜くん！」

「……」

声を張って見たが、真夜は机上の分厚い本——今日はなぜか一般書のようなだ——に目を落としたまま振り向きもしない。椎橋陽とは会話していたのに、と流石にカチンときた月葉は彼の読んでいる哲学系と思われる本を取り上げた。

「真夜くん！ 話しかけてるんだからちゃんとこっち見て答えてよ！」

「……お前はアホか」

「なっ」

やつとのことで口を開かせたと思えば、人を馬鹿にした言葉が返ってきた。

「（少しは周りを考えて行動しろ。学校で話しかけるなどは言わんが、せめて苗字で呼べ）」

イライラを全面から滲ませた真夜の小声に、月葉はようやく自分がとんでもなく目立つ行為をしてしまったことに気づく。

「聞きました奥様？ 月葉ってば『真夜くん』だってさ。いつの間以下の名前で呼ぶ仲になったんザマしょ？」

「ばっちり聞きましたよ、理音さん。やはりアルバイトが関係しているのだとわたくしは思います」

ニヤ顔の理音と瞳をキラキラさせた依姫を中心に、クラスメイトたちが月葉たちを見ながらヒソヒソ話を行っていたのだ。

「あ、あの、その、こ、これはね、えつとえつと……」

かああああああつ。

慌てふためく月葉に弁解の言葉など思いつかない。顔から火が出る勢いで赤面し、わたわたと意味のない身振り手振りをするだけだった。

助け舟を、と思って真夜に振り返るが――
――い、いない！？
彼の席は、既に蛻の殻だった。

結局、誤解は解けなかった。

あれだけ大々的に真夜の名前を呼んでしまっただけは、もはや言い訳のしようもない。実は幼馴染だったと嘘をついたところで、真夜を昔から知る椎橋陽などによってすぐにバレてしまうことは自明の理だ。

とにかく曖昧な回答をして放課後には有耶無耶にできた気がするも、どうも関心を表に出さなくなったクラスメイトたちは月葉と真夜が『そういう関係』だと納得してしまった節がある。もう時間が解決してくれることを祈るしかない月葉だった。

月葉は現在、一人で下校している。理音はバスケット部から応援を頼まれて総合体育館へ、依姫は社交パーティーに参加するとかで黒塗りの高級車に乗って先に帰ってしまったのだ。

もっとも今日は早くバイト先へ向かいたかったので、都合がよいと言えばそうなる。

「あつ」

商店街へ向かう道すがら、月葉は見覚えのある背中を見つけた。混じりのない純粹な黒色の髪をした同級生――是洞真夜の背中を。

「真夜くん」

念のため周りに知り合いがいないことを確認し、月葉はタタタツと真夜の下へ駆け寄った。彼は月葉が隣に並んだにも関わらず見向きもしない。いつものことだが……。

仕方なしに、月葉から切り出す。

「その、お昼休みのことなんだけど……なんかみんなに変な誤解されちゃったね」

「フン、まったくだ。お前のせいでクラスの居心地がこれまでに以上に悪くなった」

「あう、ごめんなさい」

月葉はしゅんと項垂れた。今回のことは全て自分に非がある。極力コンタクトを取らないようにしたいから真夜はメモ用紙をこっそり机に入れていたのに、空気を読めなかった月葉が全部台無しにしてしまった。それをわかってるから反論できない。

だから、今度こそ空気を読むことにした。周りに知り合いがいなから真夜と接触したものの、人が全くいないというわけではない。ここで例のメモ用紙の件は訊かない方がいいだろう。

「ねえ、真夜くん」

そのことを口に出せないのであればと、月葉はもう一つ気になって気になって仕方のない方の話題を振ることにした。

「……なんだ？」

真夜は鬱陶しそうにしながらも返事をしてくれる。

「日和さん、お店散らかしたりしてない？」

「……」

沈黙した。今の台詞が電源のオフスイッチだったかのように沈黙した。心なしか視線も明後日の方向を向いた気がする。

「散らかしてるんだ……」

月葉はげんなりした。

「まさかとは思うけど、そのことで呼び出したわけじゃないよね？」
半眼で問いかける。その話をするつもりはなかったが、言葉を選べば大丈夫だろう。

「安心しろ、依頼の話だ。だが、詳しいことは店で話す。ここで訊くな」

依頼の話だと確認が取れて安堵する月葉。しかし同時に緊張もしてきた。心臓が早鐘とまではいかなかったも、動悸する音が聞こえてきそうだ。

——お母さんの魔導書、一体どんな魔術が秘められてるのかな？
これでただ炎や雷が出るだけの魔導書だったら非常に残念な結果だろう。もしそうなら返してもらわなくてもいいという考えが浮かんできたが、内容がなんであれ母親の形見だ。取り返す意思に揺ら

ぎはない。それに母親の魔導書は複製できないほど複雑らしいから、そんな陳腐な内容ではないと思う。

月葉は期待に胸を膨らませ、いろいろと想像しながら歩を進める。だが、その歩みを阻害するように凄まじい爆発音が轟き渡った。

「な、なに？ 今の音？」

まるでガス管が破裂して引火したような音に月葉は震え上り、辺りを見回す。片側二車線の車道、コンビニ、安そうなアパートに民家。どの景色にもこれといって変化はない。

しかし、周りにいる人々は皆同じ方向を、少し首を後ろに傾けて見ている。

「……あれか」

真夜が静かに呟いた。月葉も彼に倣って遠くの空を見上げるように視線を斜め上にずらし――驚愕した。

「か、火事！？」

二十階以上はあると思われる高級マンションの上層部分から、夥しい量の黒煙が噴き上がっていたのだ。最初よりも小さいが爆発音も連続しており、時折オレンジ色の炎が飛び出している。

「！」

その炎を見た真夜がなにかに気づいたように駆け出した。

「真夜くん！？」

慌てて月葉も彼の後を追いかける。

真夜の足は月葉なんかじゃとても追いつけないほど速かった。危うく見失いそうになった時、丁度マンションの入口前に辿りつく。そこには大勢の野次馬が集まっていた。遠くからは消防車と救急車のサイレンも聞こえる。

マンションの上層を不安げに示してはガヤガヤと雑音を立てる野次馬たち。彼らは「商店街の放火魔の仕業だ」などとデタラメなことを口に出しているが、気にかけている場合ではなさそうだ。

「し、真夜くん……い、いきなり……どうしたの……？」

肩で息をしながら月葉が訊くと、真夜はこんな時でも感情の読めない顔のまま答える。

「あの炎、ただの火事にしては不自然だ」

月葉が全力疾走しても引き離されそうになったのに、彼は呼吸一つ乱していない。

「不自然って……もしかして」

——魔術師が関わってるってこと？

声には出さなかったが、真夜は月葉の言わんとしていることを読み取って頷く。

「可能性はある」

そう言われて一気に不安が込み上がり、月葉は改めてマンションの上層を見上げた。

と、その時——

「真夜！ それに月葉ちゃんも！」

野次馬を押し退けながら、長く綺麗な黒髪をしたモデル顔負けのスタイルの女性が近づいてきた。生地の薄いTシャツにハーフパンツといったラフな格好をしている彼女は——

「日和さん！ どうしてここに？」

である。是洞日和は月葉を、そして真夜を見ると、真剣な顔をして状況の説明を始める。

「さっき店に緊急の買い取り依頼があったのよ。それがこのマンションで、いざ来てみたらドッカーンよ？ 十中八九、暴走してるわね」

一般人のことを考えてか、日和はあえて話の主語を省いていた。すなわち、魔導書。

「出火したと思われるフロアから上は全部どっかのお金持ちが借り切ってたらしくて、他の住民たちに被害はないわ。みんな避難してる。でもそのお金持ちが無事かどうかはわからないそうよ」

「そんな、助けないと！」

「フン、暴走時に近くにいたのならそいつはとっくに死んでいる。このまま暴走が収まるのを待ってから回収した方がいいだろう」

冷酷な判断をする真夜。彼なら？ 粹護？ の魔導書とかを使って炎の中でも平気そうなのに、と月葉は思う。思うが、実際に月葉は魔導書の暴走を見ている。その恐ろしさを知っている。だから、彼の言っていることが現実的であると理解できる。

「だけど――」

「もしかしたら生きてるかもしれないよ。確認もしてないのに決めつけるなんてダメだよ」

「僕に確認してこいと言うのか？ 冗談じゃない。そんな不確定な憶測でわざわざ危険に飛び込む馬鹿がどこにいる」

「でも、真夜くんなら平気でしょ？」

「……」

真夜は押し黙った。否定しないということは、やはり大丈夫なのだろう。

「……あのな」

と、真夜が言いかけたその時、マンションの上層から悲鳴が上がった。

見ると、炎が広がっている一番下の階のベランダに、幼い子供を背負った母親と思われる女性が身を乗り出していた。必死に助けを求めている。

位置からして安否のわからない金持ちではないようだが、逃げ遅れた人がまだいたのだ。恐らく廊下が炎と煙に塞がれて出るに出られないのだろう。

消防車のサイレンは先程よりも近くなっているが、到着したところで無事に救助できるかどうか怪しい。

「チッ」

真夜は舌打ちすると、マンションの入口目がけてダッシュした。野次馬たちが止めようと声をかけているが、真夜は構わずマンションの中へ突入する。

「真夜くん！」

「ぱあぁ、と月葉は顔を輝かせた。不確定が確定になったからだろうか。逃げ遅れた母子を見るや否やの行動は迅速だった。」

「——真夜くん、冷血そうに見えてもやっぱり優しいところもあるんだ。」

アドリアンの件でもそうだったが、彼はなんだかんだ言いながらもけっこうお人好しなのかもしれない。

「月葉ちゃん、あの坊主を信頼してくれてるのはお姉さんのにも嬉しいんだけどね。今はちよろっと危ないのよ」

日和がその綺麗な黒髪を弄りながら、音量低めに少し深刻な口調で月葉に言ってきた。

「え？　危ないってどういうことですか？」

「真夜ね、昨日限界まで解析をやったのよ。なんでもない顔してるけど、今の真夜は精神的に相当疲労しているわ。その証拠に、今日は魔書を読んでなかったでしょう？」

「あっ……」

言われて月葉は思い出す。昼休み、彼はいつもの図書館ではなく教室で普通の本を読んでいた。後で聞いた話だが、今日から総合体育館の拡張工事が行われていて図書館よりも教室の方が静かだったとか。

「だから今の真夜は、あまり長く魔導書を使えないのよ」

「そう、だったんですか……」

彼の疲労も知らずに月葉は無責任なことを言ってしまった。そういう話になってくると急激に彼のことが心配になってくる。

「——真夜くん……大丈夫、だよね？」

無力な月葉は彼の無事を祈り、ただ信じることしかできなかった。

真夜はマンションの非常階段を駆け上がった。

エレベーターが止まっているのだから、そうするしかなかったのだ。いや、たとえ動いていたとしてもトラブルが発生しない可能性は低い。これで正解だ。

このマンションは二十三階建て。目測だが、逃げ遅れた母子は十五階前後にいた。そこまで一気に駆け上るといくら真夜でも息を切らしてしまう。

だが、休んでいる暇はない。

真夜は十五階にある非常階段の扉を蹴り開ける。すると黒煙と熱波が一気に押し寄せてきた。咄嗟に腕で顔を庇う。

——？ 粹護？を使うか？

そう思ったが、やめた。魔導書に喰わせる魔力の制御は精神力で行っている。真夜は昨日、特に集中を必要とする？ 解析？ の魔導書を長時間使用したため、精神が酷く憔悴しているのだ。一晩休んだのでそれなりに回復はしているけれど、魔導書の多用はできそうにない。

真夜はハンカチを口にあて、心持ち姿勢を低めにして熱と煙の蔓延地帯へと侵入する。

「……」

ざっと廊下を見回す。炎と煙の量から推測するに、この階はまだ火が回ってきて間もないようだ。逃げられないレベルではない。

——まだ上か。

真夜が煙立ち込める天上を見上げた次の瞬間——ドゴン！！

天上が崩れ、大きな穴が穿たれた。

落下してくる天上の破片を真夜はバックステップでかわす。続いて？ 粹護？ の魔導書を虚空から引き抜き、光の防御層を展開。

ここで？ 粹護？ を使った理由は、たった今穿たれた大穴から一冊

の魔導書が降下してきたからだ。

暴走した魔導書は人の意識に反応する。それは人が意識的に使用するための設計が暴走によりバグったと考えられているものの、詳しいことはわかっていない。わかっているならとつくに改善された魔導書が出回っているはずだ。

暴走魔導書の前に赤い魔法陣が広がり、炎の球が真夜に向けて射出される。

——？火弾？だと？

光の防御層で火炎球を弾いた真夜は怪訝に思う。

——あれだけでこれほどの火災を起こしたのか？

？火弾？の魔導書は初級の中でも特にシンプルな魔導書だ。暴走しているとはいえ、これほど広いマンションのフロアを短時間で火の海に変える力はない。

一冊だけなら。

「！」

後方から二発の破碎音。振り返ると、同じように天上に穴を穿って二冊の魔導書が降りてきた。それらも？火弾？の魔導書だ。

「フン、なるほど、三冊あったというわけか」

それはそれでまた別の疑問が生じるが、検討は後回しにした方がよさそうだ。

——まずは暴走を止めることが先だ。

三冊の暴走魔導書から放たれる火炎弾が真夜の防御を砕こうと襲い来る。真夜は鼻息を鳴らすと、？粋護？の魔導書はそのままに左手を横へ伸ばす。

「第六十三段第十二列——」

？書棚？の位置を唱え、手にした二冊目の魔導書を開く。

「——？水渦？」

途端、足下に展開した魔法陣からとんでもない量の水が溢れ返り、？粋護？の魔導書で守られた範囲以外の廊下全体を一瞬にして浸水させた。

しかもそれだけでは収まらない。流動する水が洗濯機のように大渦を成し、三冊の暴走魔導書を呑み込んでフロアの炎を完全に鎮火させた。

「くっ」

真夜は片膝をつき、？水渦？の魔導書を？書棚？に戻した。その瞬間、大渦は幻のように消え去る。

――二級魔導書を？粹護？と併用しただけで疲労を感じるとは…やはり昨日は無理をし過ぎたか。

だが、今さら後悔しても遅い。真夜は周囲を見回して三冊の暴走魔導書の存在を確認する。三冊とも床に転がっており、暴走は鎮圧できているようだった。恐らく、それほど魔力を溜め込んでいなかったのだろう。

三冊とも回収し、？書棚？に収める。するとその時、上階から子供の泣き声が小さく聞こえた。

「この上のような」

真夜は床を蹴って天上に穿たれた穴の縁に手をかけた。それから懸垂の要領で体を持ち上げ、一息に十六階の廊下へと飛び上がる。こういうことができるのと知られてしまったから、椎橋陽がしつこく体操部に勧誘してくるのだ。まったくもって鬱陶しい。

十六階は酷い惨状だった。廊下のほぼ全域に黒煙と肌を焦がすような熱気が満ち、オレンジ色に揺らめく炎が壁となって進路を塞いでいる。？粹護？の魔導書を維持していなければ立ってすらいられないだろう。

「……向こうか」

真夜は炎と煙を押し退けつつ、泣き声のする方向へ歩いていく。早く見つけなければこちらの命も危ない。

幸いなことに目的の部屋はすぐに見つかった。真夜は燃え尽きそうなドアを蹴り倒して中に踏み込む。高級マンションだけに4LDKの室内は広いが、真夜は迷いなくベランダがあった方角に足を進める。

ベランダでは煙を吸って昏倒したと思われる母親と、彼女の前で泣き叫ぶ五歳くらいの男の子がいた。

真夜は？ 粹護？ の魔導書を解除して仕舞うと、まずは母親の生死を確かめる。脈があるかわかり、次に喚き散らす子供に顔を向け――

「うるさい！ 泣くな！」

苛立たしげに怒鳴って強制的に黙らせた。

「お前もその年で親を失くしたくはないだろう？ だったら黙って僕の言うことを聞け」

嗚咽しながらも頷いてくれた子供の頭に、真夜は優しく手を乗せる。

「お前も、お前の母さんも僕が必ず助けてやる。だから泣くのは助かった後にしろ」

強くそう言い聞かせると、真夜はそのまま男の子を背中に負ぶった。続いて母親もそっと抱き起こす。

直後、爆音と共に炎と煙が部屋に広がってきた。

火炎地獄と化す後方を見て、真夜は苦々しく舌打ちする。

――？ 水渦？ を使いたいが、？ 粹護？ と併用しないと僕自身も呑み込まれる。それに精神的にも魔導書の多重使用は無理だ。

だからといって？ 粹護？ の魔導書だけで突破しようにも、大人と子供を一人ずつ担いだ状態で無事に脱出できるとは思えない。途中で力尽きる可能性の方が高いだろう。

そうなると……真夜はベランダから見える外の景色に視線をやる。

――魔術師の存在をバラすような行為になってしまいが、仕方ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9538x/>

ご不要な魔導書買い取ります

2011年12月7日00時49分発行